大橋町遺跡第２次発掘調査報告書

―新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業（若松５）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書―

２００７年１１月

神戸市教育委員会

序

神戸市長田区は阪神・淡路大震災で最も大きな被害を受けた地域の一つです。震災により歴史を重ねてきた街の風景は失われましたが、その後の復興再開発事業、区画整理事業に伴い、新しい街の姿が創られつつあります。

街には、記憶に残る風景よりも遥か昔からの人々の生活痕跡が残っています。それらは地面の下に眠っており、発掘調査を通じて皆様方に知っていただくことができます。大橋町遺跡における発掘調査では、およそ2,000年前の弥生時代からこの地域において当時の人々の生活が始まったことが判明し、平安時代～鎌倉時代には小規模なムラが営まれたことも明らかになりました。

今、地元ではこの地域の歴史を風化させないために、産業、文化に関するさまざまな催しが開かれ、モニュメント製作の実現に向けての努力も続けられています。発掘調査の成果は街がたどって来た歴史を知る上ではたいへん貴重な資料であるとともに、地元の財産となります。こうした発掘調査の成果が、今後の地元の活性化の一助となることを期待します。

最後になりましたが、現地における発掘調査事業の円滑な推進ならびに報告書刊行にご協力いただきました関係諸機関、各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成19年11月

神戸市教育委員会

例　　言

1．本書は神戸市長田区若松町３丁目において、平成18年４月17日～平成18年６月24日の間で実施した大橋町遺跡第２次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．調査は新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴うもので、神戸市教育委員会・財団法人神戸市体育協会が神戸市都市計画総局の委託を受けて実施したものである。

3．現地での調査は阿部敬生（１区）・藤井太郎（２・３区）が行い、本書の作成は藤井太郎が行った。

4．本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の１の地形図「神戸首部」・「神戸南部」を、詳細位置図は、神戸市発行の2,500分の１の地形図「大撫・長田港」の一部を使用した。また写真図版には神戸市行財政局の航空写真（長田区DT４07・４12）を使用した。

5．本書で使用した方位は座標北で、その座標は日本測地系の平面直角座標系第Ⅴ系である。標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示した。

6．現地での遺構写真等については阿部敬生・藤井太郎が撮影を行い、出土遺物写真の撮影は、神戸市埋蔵文化財センターにおいて独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　牛嶋茂氏の撮影指導の下、杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。

7．航空写真測量及び第１次調査遺構平面図との合成図作成を株式会社CROソリューションズに委託した。

8．出土木製品の樹種同定分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

9．整理作業は水洗・接合・復元を神戸市埋蔵文化財センターにおいて実施し、土器の実測、図面の浄書は藤井が行った。

10．本書にかかわる出土遺物及び図面等の記録類は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。

11．発掘調査及び報告書作成事業は神戸市文化財保護審議会の指導のもと、以下の組織で実施された。

平成18・19年度

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古担当）

植上重光	前神戸女子短期大学教授（～平成19年７月14日）
工楽善通	人阪府立狭山池博物館館長
和田晴吾	立命館大学文学部教授

平成18年度（現地調査）・19年度（報告書作成）

教育委員会事務局

教育長	小川　雄三
社会教育部長	大谷　幸正（18年度）
	黒住　章久（19年度）
社会教育部参事	柏木　一孝
（文化財課長事務取扱）	
社会教育部主幹	丸山　潔
（埋蔵文化財指導係長事務取扱）	
社会教育部主幹	渡辺伸行
（埋蔵文化財センター所長事務取扱）	
埋蔵文化財調査係長	丹治　康明（18年度）
	千種　浩（19年度）
文化財課主査	安田　滋
文化財課主査（兼務）	山本　雅和
事務担当学芸員	前田　佳久（18年度）
同	阿部　敬生
同	中谷　正（19年度）
遺物整理担当学芸員	黒田　恭正
保存科学担当学芸員	中村　大介

（財）神戸市体育協会

会長	家治川　豊（18年度）
	衣　孟宏（19年度）
副会長	水田　祐次
（常務理事事務取扱）	
常務理事	碩　弘四郎
総務課長	横関　勇
総務課主査	山本　雅和
調査担当学芸員	阿部　敬生（18年４月）
同	藤井　太郎

12．最後に、現地での調査及び本書の作成にあたっては下記の方々にご協力いただきました。ここに記して感謝いたします。

神戸市都市計画総局新長田南再開発事務所　浅沼・日本国土・大木特定建設工事共同企業体

また、調査地周辺の今、昔の様子について「長田ふれあい足湯」に日参されている方々より貴重なお話を伺うことができました。当地の歴史を語る人々の記憶も文化的財産であることをここに記します。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに

1．大橋町遺跡と周辺の遺跡 …… 1
(1) 遺跡の位置と地理的環境 …… 1
(2) 周辺の遺跡 …… 2
2．調査の経緯 …… 5
3．整理・報告書作成作業 …… 7

Ⅱ．検出遺構と出土遺物

1．基本層序 …… 9
2．1・2区の調査 …… 11
(1) 検出遺構 …… 11
(2) 小　結 …… 12
3．3区の調査 …… 13
(1) 中世の遺構と出土遺物 …… 14
(2) 古墳時代の遺構と出土遺物 …… 23
(3) 弥生時代の遺構と出土遺物 …… 25
(4) 遺構に伴わない遺物 …… 30
(5) 小　結 …… 30

Ⅲ．大橋町遺跡第2次調査で出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ(株) …… 31

Ⅳ．ま と め

(1) 大橋町遺跡第2次調査の成果 …… 35
(2) SE01にみられる地震痕跡と思われる事象について …… 37
(3) 弥生時代の遺構－溝の検出とその性格について …… 39
(4) ま と め …… 41
(5) あとがき …… 42

報告書抄録

挿 図 目 次

図1　大橋町遺跡位置図 …… 1
図2　周辺の主な遺跡（1／30,000） …… 3
図3　調査地位置図（1／5,000） …… 5
図4　調査地区割図 …… 6
図5　調査区全体図 …… 8
図6　1・2区土層断面図 …… 9
図7　3区土層断面図 …… 10
図8　1・2区平面図及びSD01半・断面図 …… 11
図9　SD02・03半・断面図 …… 12
図10　3区平面図 …… 13
図11　SX01土層断面図 …… 14
図12　SX01及び周辺遺構平面図 …… 15
図13　SX01出土の遺物 …… 16
図14　SX01出土の木製品 …… 17
図15　SX01東肩部検出土坑平面図 …… 18
図16　SK03半・断面図 …… 18
図17　SK03出土の遺物 …… 18
図18　SK04半・断面図及び遺物出土状況 …… 19
図19　SK04出土の遺物 …… 19
図20　SX02半・断面図 …… 20
図21　SX02出土の遺物 …… 20
図22　SE01半・断面図 …… 21

図23　SE01出土の遺物 ……22
図24　SE01出土の木製品 ……22
図25　SD11平・断面図 ……23
図26　SD11遺物出土状況平・立面図 ……24
図27　SD11出土の遺物 ……24
図28　3区北半検出溝群　半・断面図……25
図29　3区南半検出溝群　平・断面図……27
図30　SD17遺物出土状況平面図 ……28
図31　SD17・18出土の遺物 ……28
図32　SK05平・断面図 ……28
図33　SP05出土の遺物 ……29
図34　SP09・10土層断面図 ……29
図35　調査区南西部検出遺構　平面図……29
図36　遺構に伴わない遺物……30
図37　大橋町遺跡第1・2次調査地平面図（合成図）…36
図38　挿図写真11の線描図
（SE01掘形壁面の土層の「ずれ」）……38
図39　SE01出土曲物破損状況模式図 ……39
図40　弥生時代の溝　推定グルーピング図……40
図41　周辺遺跡検出の耕作に伴う溝……41
図42　長田区平野部微地形復元図……42

表　目　次

第1表　周辺の遺跡……4
第2表　調査期間　一覧表……7
第3表　樹種同定結果……31

挿図写真目次

挿図写真1　大橋町遺跡第1－6次調査地と
若松町5丁目遠景……5
挿図写真2　長田ふれあい足湯……6
挿図写真3　調査作業風景……7
挿図写真4　クレーン撮影作業風景……7
挿図写真5　遺物整理作業風景……7
挿図写真6　曲物　箍の綴じ部……22
挿図写真7　SD11遺物出土状況 ……24
挿図写真8　SK05上層断面 ……28
挿図写真9　出土木材組織顕微鏡写真……33
挿図写真10　SE01断ち割り状況 ……38
挿図写真11　SE01断ち割り断面 ……38
挿図写真12　3区近～現代井戸の掘形に
みられる土層の「ずれ」……39

写真図版目次

写真図版　調査地遠景（海上より）
写真図版1　1．調査地遠景（東上空から）
2．調査地周辺垂直写真
平成10（1998）年撮影
【神戸市行財政局航空写真データより】
写真図版2　1．1区SD01検出状況（北西から）
2．2区SD01及びSK01検出状況（西から）
写真図版3　2区全景（南東から）
写真図版4　1．2区SD02・03（南から）
2．2区SD02北半（南から）
写真図版5　3区垂直写真（モザイク合成）
写真図版6　1．3区北半全景（北東より）
《クレーン撮影》
2．3区北半（北から）
3．3区北半（東から）
写真図版7　3区南半全景（東から）《クレーン撮影》
写真図版8　1．SX01全景（北東から）
2．SX01中央部土層堆積状況（北から）
写真図版9　1．SX01及び周辺土坑（北から）
2．SK03土層断面（南から）
3．SK03遺物出土状況（北から）
4．SX02土層断面（南から）
5．SX02全景（南から）
写真図版10　1．SK04全景（南西から）
2．SK04土層断面（南西から）
3．SK04上面検出状況（北西から）
4．SK04遺物出土状況（南西から）
写真図版11　1．SE01全景（南から）
2．上層土層断面（南から）
3．上層遺物出土状況（南から）
4．下層堆積状況及び土層断面（南から）
5．曲物出土状況（南から）
写真図版12　1．SD11全景（北東から）
2．土層堆積状況及び遺物出土状況
（北西から）
3．遺物出土状況近景（北西から）
写真図版13　1．SD08北半全景（南東から）
2．SD07断面⑦（南東から）
3．SD08断面⑭・⑮（北西から）
写真図版14　1．SD06・07（南東から）
2．SD06断面⑤（東から）
3．SD07断面⑧（南から）
写真図版15　1．3区南西部全景（北東から）
2．SD17・18西半（北東から）
3．SD13・14土層断面（西から）
写真図版16　1．SD18土層断面及び石の出土状況
（北東から）
2．SD17遺物出土状況（南西から）
3．SP09～12（南から）
4．SP09・10土層断面（南東から）
5．SP02土層断面（南東から）
6．SP03土層断面（南東から）
写真図版17　SX01出土の遺物(1)
写真図版18　SX01出土の遺物(2)
写真図版19　SX01及び周辺土坑出土の遺物
写真図版20　SE01・SD11・SD17・18・SP05出土の遺物
写真図版21　遺構に伴わない遺物

Ⅰ．はじめに

1．大橋町遺跡と周辺の遺跡

(1) 遺跡の位置と地理的環境

大橋町遺跡は、東西に長く延びる神戸の市街地の西端、現在のJR新長田駅の南側約0.2kmに位置する。周辺は元々商店や住居、工場が混在する繁華な町であったが、平成7年の兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）により甚大な被害を被った。震災後は再開発ビルを中心とする高層建築が林立し、市街地西部の中心的な地域として新たな都市景観を創造しつつある。遺跡は平成15年に新長田駅南地区震災復興再開発事業に伴い発見され、今のところ明らかになっている遺跡の範囲はJR山陽本線（神戸線）と国道2号線に挟まれた東西100m、南北150mの範囲で、弥生時代～中世の集落跡と考えられている。遺跡の名称は、はじめに遺構・遺物が確認された大橋町5丁目の地名に因んでいる。

地形的には六甲山系の西端に特徴的な山容を映す高取山を北に望み、高取山を挟み南流する苅藻川（現新湊川）と妙法寺川の両河川間に挟まれた現標高5～6mの北西から南東への緩やかな下がり地形を呈する沖積地上に立地している。苅藻川は東約0.7km、妙法寺川は西約1.4kmに位置し、現在の海岸線までの距離は約0.8kmである。両河川の間に扇状地はあまり発達しておらず、西六甲山系南麓に形成される典型的な沖積地の地勢を示している。

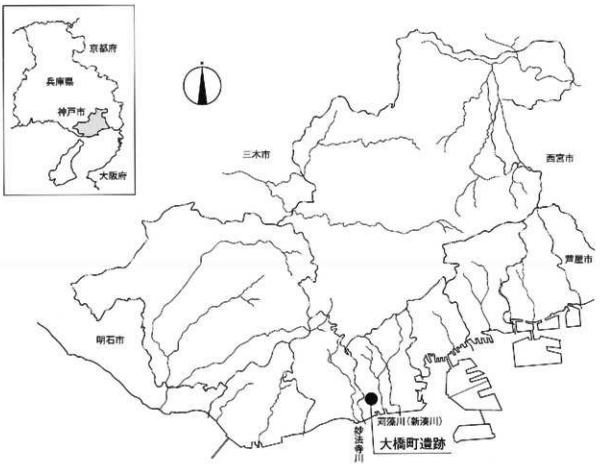


図1　大橋町遺跡位置図

(2) 周辺の遺跡

大橋町遺跡周辺に立地する主要な遺跡を右頁図（図２）に示す。

縄文時代　苅藻川中流域左岸に立地する長田神社境内遺跡や二番町遺跡、五番町遺跡で後期～晩期の遺物が出土し、住居址の発見はないものの土坑などの遺構が散見される。五番町遺跡では後期に属する舟形土器をはじめとする多量の遺物が出土している。

弥生時代　妙法寺川流域では扇状地扇央部に立地する戎町遺跡で前期の集落の一部が確認されている。旧河道内に設けられた木器貯蔵施設とされる円形杭列遺構や整然とした小区画水田が確認されている。中期には竪穴住居や土坑などの遺構や土器、石器などの多量の遺物が出土し、当地域における拠点集落に発展したと推測され、近年の調査では方形周溝墓で構成される墓域の発見があった。後期になると戎町遺跡では遺構、遺物の検出が減少するが、周辺の大手町遺跡、大田町遺跡、若松町遺跡や長田神社境内遺跡、長田神社南遺跡、御蔵遺跡で集落の形成や集落域の拡張の傾向が窺える。また旧湊川流域でも楠・荒田町遺跡、大開遺跡など縄文時代晩期、弥生時代前期から中期に盛期を迎える集落の規模が縮小し、祇園遺跡、兵庫松本遺跡、塚本遺跡などの中期末～後期の遺跡が形成される。

古墳時代　古墳時代では背後の丘陵上に得能山古墳、会下山二本松古墳、夢野丸山古墳の前期古墳が築造され、弥生時代後期から伸張した遺跡の奥津城と考えられる。また苅藻川河口付近に存在したと考えられる念仏山古墳は全長約200mの大型の前方後円墳であったとされ、明治時代の仮製図に描かれた土地の形状などから推測される。当地域が摂津・播磨国の国境に近い場所であることを考えればその存在は不確定ながら重要である。後期には苅藻川右岸の丘陵に古墳群が形成され、さらに苅藻川の最奥部には須恵器窯が存在したとされる。集落では松野遺跡において多数の住居址が発見されたほか、御船遺跡、神楽遺跡、大田町遺跡、鷹取町遺跡などでも住居址が確認されている。

律令期以降　奈良時代～平安時代には主要地方道神戸・明石線に沿って官衙的な様相を示す御蔵遺跡や大田町遺跡、長田野田遺跡、東に位置する上沢遺跡や白鳳寺院址とされる室内遺跡などの遺跡が営まれ、神戸・明石線は古代山陽道の痕跡と目される。また祇園遺跡、楠・荒田町遺跡の周辺で平氏関連の重要な遺跡が発見されている。中世の集落跡については後世の耕地化や市街地化の影響により明確な存在を把握しきれない部分があるが、二葉町遺跡でまとまった遺構が検出されている。付近の海岸は駒ヶ林の名で古くからの良港であったとされる。また旧湊川の河口に港湾都市として一大都市を形成した兵庫津遺跡がある。江戸時代前期、元禄９（1696）年に描かれた兵庫津絵図には、兵庫津から延びた道沿いに点在する集落と周囲に水田が描写される。中世段階も大部分は耕地であったと推測される。

近接する遺跡　大橋町遺跡の西側に古墳時代中期～後期の集落である松野遺跡が存在する。第１次調査において豪族居館あるいは神殿と解釈される掘立柱建物群と柵列を検出し、この建物群の南側では震災後の再開発事業に伴う発掘調査において竪穴住居をはじめとする多くの遺構が確認されている。また多量の滑石製品の出土は集落内祭祀を想起させる。

また国道２号線を挟んだ南側には二葉町遺跡が存在する。古代末～中世の掘立柱建物や井戸、水溜め遺構、耕作痕が多く確認されている。準構造船の材を枠材に転用した井戸の検出や漁猟具の出土量から駒ヶ林の海に近い半農半漁の集落の姿を髣髴とさせる。

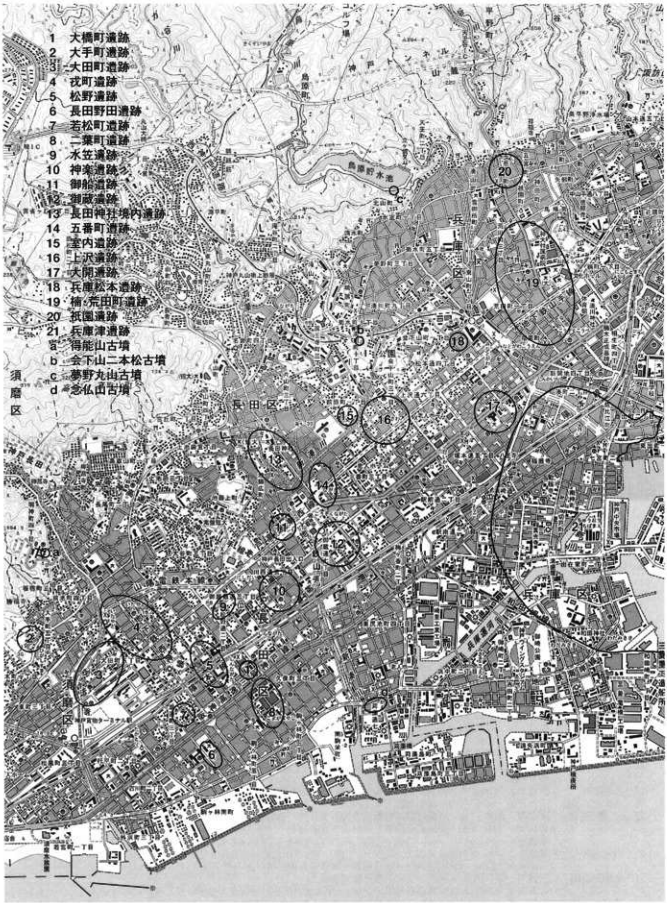


図2　周辺の主な遺跡（1／30,000）

番号	遺跡名	時　代	主な遺構・遺物
1	大橋町遺跡	弥生時代～江戸時代	（平安～鎌倉）掘立柱建物・井戸・墓
2	大手町遺跡	弥生時代中期～江戸時代	（弥生後期）竪穴住居・溝、（江戸時代）屋敷跡
3	大田町遺跡	古墳時代～平安時代	（古墳時代）滑石製品、（奈良・平安）掘立柱建物・硯（線刻文字）
4	戎町遺跡	弥生時代前期～室町時代	（弥生前期）水田・円形杭列・広鍬未製品（弥生中期）方形周溝墓
5	松野遺跡	弥生時代後期～鎌倉時代	（古墳中期）居館、（古墳後期）竪穴住居・滑石祭祀・掘立柱建物
6	長田野田遺跡	奈良時代～鎌倉時代	（奈良時代）掘立柱建物
7	若松町遺跡	弥生時代後期～鎌倉時代	（弥生後期）竪穴住居・畠畝溝、（平安時代）掘立柱建物
8	二葉町遺跡	奈良時代～鎌倉時代	（平安～鎌倉）掘立柱建物・井戸・船材転用井戸
9	水笠遺跡	弥生時代中期～鎌倉時代	（弥生中期）溝、（古墳時代後期）掘立柱建物・耕作痕
10	神楽遺跡	弥生時代後期～平安時代	（古墳中～後期）竪穴住居・韓式土器、（平安）掘立柱建物・施釉陶器
11	御船遺跡	弥生時代後期～鎌倉時代	（古墳後期）掘立柱建物、水田
12	御蔵遺跡	弥生時代後期～鎌倉時代	（弥生時代）掘立柱建物、（飛鳥～平安）掘立柱建物・墓
13	長田神社境内遺跡	縄文時代～鎌倉時代	（弥生後期）竪穴住居・小型仿製鏡、（近世）神官屋敷跡
14	五番町遺跡	縄文時代～鎌倉時代	（縄文時代後期）舟形土器
15	室内遺跡	奈良時代～平安時代	（奈良時代）仏像塑像片、（平安時代）瓦
16	上沢遺跡	縄文時代晩期～鎌倉時代	（古墳中期）大壁造建物、（奈良・平安）掘立柱建物・井戸・銅椀
17	大開遺跡	縄文時代晩期～鎌倉時代	（弥生前期）環濠集落
18	兵庫松本遺跡	縄文時代～鎌倉時代	（弥生時代）竪穴住居・旧河道
19	楠・荒田町遺跡	弥生時代前期～鎌倉時代	（弥生前期）貯蔵穴、（弥生中期）方形周溝墓
20	祇園遺跡	弥生時代後期～江戸時代	（平安末期）庭園遺構・東播系瓦・京系瓦
21	兵庫津遺跡	奈良時代～江戸時代	（中世）礎石建物（江戸時代）町屋

第1表　周辺の遺跡

主要参考文献

1	大橋町遺跡	中谷正　2006　『大橋町遺跡　第1次－1～6次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
2	大手町遺跡	中谷正編　2003　『大手町遺跡　第1～4・6次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
3	大田町遺跡	森内秀造・山上雅弘　1993　『神戸市須磨区大田町遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
		口野博史・川上厚志　1994　「大田町遺跡第2次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
		藤井太郎　2001　「大田町遺跡第12次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
4	戎町遺跡	山本雅和　1989　『戎町遺跡第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会
		山本雅和　1998　「戎町遺跡第19次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財調査年報」神戸市教育委員会
		山口英正　1999　「戎町遺跡第15次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財調査年報」神戸市教育委員会
		藤井太郎編　2005　『戎町遺跡第35・38・50・56次調査 松野遺跡第32・33・38次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
5	松野遺跡	千種浩編　1983　『松野遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会
		口野博史編　2001　『松野遺跡発掘調査報告書　第3～7次調査』神戸市教育委員会
		関野豊編　2002　『松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
6	長田野田遺跡	藁康保明・小林健二　1998　「長田野田遺跡第1次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
7	若松町遺跡	山田清朝・高木芳史　2000　『若松町遺跡』神戸市教育委員会
		口野博史　2001　「若松町遺跡第2次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
8	二葉町遺跡	川上厚志編　2001　『二葉町遺跡第3・5・8・9・12次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
9	水笠遺跡	関野豊編　2002　『松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
		山口英正　2006　「水笠遺跡第26次調査」『平成15年度神戸市埋蔵文化財調査年報』神戸市教育委員会
10	神楽遺跡	菅本宏明　1981　『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
11	御船遺跡	池田毅　2000　「御船遺跡第2次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
12	御蔵遺跡	安田滋編　2001　『御蔵遺跡第4・6・14・32次調査報告書』神戸市教育委員会
		安田滋編　2001　『御蔵遺跡第17・38次調査報告書』神戸市教育委員会
		谷正俊編　2003　『御蔵遺跡Ⅴ　第26・37・45・51次調査』神戸市教育委員会
13	長田神社境内遺跡	黒田恭正　1990　『長田神社境内遺跡発掘調査概要』神戸市教育委員会
		藤井太郎・丸杉俊一郎　2001　「長田神社境内遺跡第10次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
14	五番町遺跡	松林宏典　1997　「五番町遺跡」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
15	室内遺跡	水口富夫・平田一李・高瀬一嘉　1998　「室内遺跡」「平成9年度年報」兵庫県埋蔵文化財調査事務所
16	上沢遺跡	口野博史・関野豊　2003　「上沢遺跡第33次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
		谷正俊編　2003　『上沢遺跡Ⅲ』神戸市教育委員会
17	大開遺跡	前田佳久　1993　『大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
18	兵庫松本遺跡	中谷正編　2005　『兵庫松本遺跡　第2～4・12・17・19次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
19	楠・荒田町遺跡	丸山潔　1980　『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
		丸山潔　1990　『楠・荒田町遺跡Ⅲ』神戸市教育委員会
		黒田恭正・阿部敬生　1995　「楠・荒田町遺跡第11次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
20	祇園遺跡	須藤宏　1997　「祇園遺跡第2次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
		富山直人　2000　『祇園遺跡第5次発掘調査調査報告書』神戸市教育委員会
21	兵庫津遺跡	岡田章一編　2002　『兵庫津Ⅱ』兵庫県教育委員会
		内藤俊哉　2001　「兵庫津遺跡第15次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
a～d	得能山古墳 会下山二本松古墳 夢野丸山古墳 念仏山古墳	喜谷美宣　1989　「古墳時代　前方後円墳の成立と発展」『新修神戸市史　歴史編1』神戸市

2．調査の経緯

遺跡の発見　大橋町遺跡の周辺は早くから市街地が進み、住宅や店舗、工場が立ち並ぶ活気あふれる町であった。平成７年１月17日未明に兵庫県南部地震が発生、大橋町遺跡の立地する長田区～須磨区にかけては、建物倒壊や大規模な火災により甚大な被害を被り、往時の面影はほとんど失われてしまった。震災後、JR新長田駅周辺において復興区画整理事業や震災前から進められていた再開発事業が立ち上がり、それと並行して事業地内の埋蔵文化財の包蔵地として周知されている遺跡内での発掘調査の実施はもとより、その周辺においても遺跡の拡がりや埋蔵文化財の存在を確認する目的で試掘調査が実施された。現在、大橋町遺跡とする街区では永らく試掘調査の実施が困難な状況にあったが、再開発ビルの建設開始に伴い、従前建物の移転、除却の作業進捗状況に合わせて当該地での埋蔵文化財の有無を確認する作業が行われた。

平成15年の大橋町５丁目街区での試掘調査の結果、遺構・遺物が確認され、新たな遺跡として当教育委員会では「大橋町遺跡」と命名、周知化を図り、大橋町５丁目街区のうち、再開発ビルの建築範囲について発掘調査（第１次調査）を実施した。

第１次調査は現況建物の撤去や移設を含めた工事と同時に進められたため、都合６回に分割して調査を実施した（第１－１～６次調査）。調査では平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物や墓、溝、井戸や水溜め状遺構の他、多くの耕作痕（鋤溝）など古代末～中世の遺構

挿図写真１　大橋町遺跡第１－６次調査地と若松町５丁目遠景

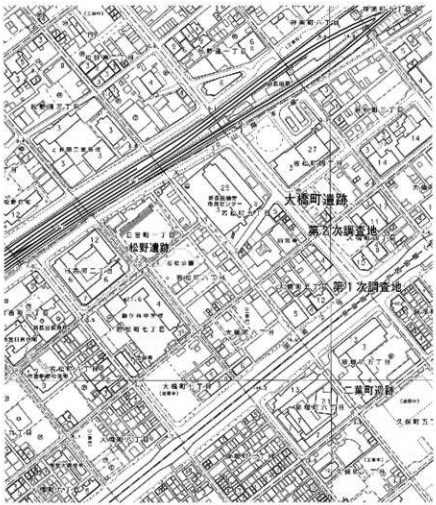


図３　調査地位置図（1／5,000）

を中心に、古墳時代の溝、弥生時代の柱穴や溝を検出した。復元された掘立柱建物は9棟で、うち1棟の建物のそばから屋敷墓と考えられる木棺墓1基を検出した。出土遺物などから建物は12世紀末～13世紀前半に構築されたと考えられ、以降に新たに築かれた建物の存在は明確でなく、一時期に形成された居住域であったと推測されている。

調査の経過

今回の調査は、第1次調査地の北側に位置する若松町5丁目の街区を二分する東西道路より南半の地区を対象としたもので、調査原因は先の調査と同じく再開発ビル建設に伴うものである。当街区には震災後に仮設市場ができ、生活に供するとともに、市場の中央の広場には大橋町5丁目から湧出する温泉を用いた「長田ふれあい足湯」が設けられ、地域住民の憩いの場となっていた。今回の事業の実施に際して「足湯」は先の第1次調査地の南側の仮設建物内に移されたが、地元住民はもとより、長田区を離れた人々、遠来からの客も集う場所として賑いをみせている。

挿図写真2　長田ふれあい足湯（平成19年5月撮影）

今回の調査地である若松町5丁目の街区においても第1次調査の結果から遺跡の拡がりが予測され、掘削が可能な箇所より順次試掘調査を進めた。その結果、従前建物の基礎などにより既に文化財が失われている箇所は多かったものの、それらの影響の少なかった部分では遺構・遺物が検出され、都合5回にわたる試掘調査の結果から発掘調査が必要となる箇所（範囲）及び面積を算定し、事業地内の約1,600㎡の範囲について全面調査を実施することとなった。

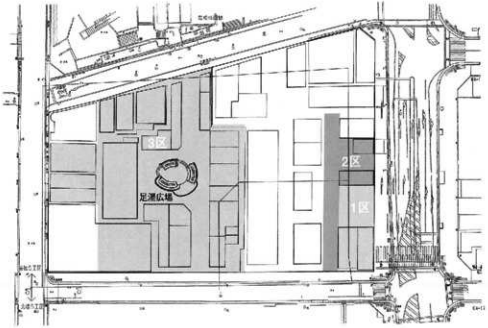


図4　調査地区割図

調査は既存建物の解体・撤去作業と並行して行い、まず掘削可能であった1区での調査を実施した後、残土置き場の関係から3区の調査を南北に分けて反転掘削作業にて行い、同時に地中障害物の撤去の合間を縫って、1区に隣接する2区の調査を実施した。

調査の方法　調査地内には建物基礎の解体後に均された整地土、盛土が厚く堆積し、現地表下0.6～0.8mに中世の耕土層と考えられる灰色砂質土が堆積する。調査ではこの中世の耕土層直上までを重機により除去し、後は人力による掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

遺構については地上写真撮影により状況を記録するとともに、空中写真撮影を実施し、合わせて調査区の全体図の作成を空中写真測量により1／20の精度で行い、調査の完了後に図化・校正作業を進め、今回の調査区の平面図とともに第1次調査地も含めた全体図を作成した。遺物の出土した遺構や調査区の土層断面図については現地で1／20、1／10の精度で図化を行い、記録作業を実施した。

3．整理・報告書作成作業

調査終了後より今年度（平成19年度）にかけて出土品の水洗作業及びネーミング作業を実施し、遺構からの出土土器を中心に接合、石膏補強や塗色復元を行い、木製品については樹種同定を外部に委託するとともに、遺物の写真撮影を埋蔵文化財センターにおいて行った。これら遺構・遺物の検出状況を整理しながら順次、報告書の作成作業を進めていった。

調査区	面積	調査期間
第1区	約140㎡	平成18年4月17日～4月25日
第2区	約140㎡	平成18年5月23日～5月30日
第3区	約1,280㎡	平成18年5月9日～6月24日

第2表　調査期間一覧表

挿図写真3　調査作業風景

挿図写真4　クレーン撮影作業風景

挿図写真5　遺物整理作業風景

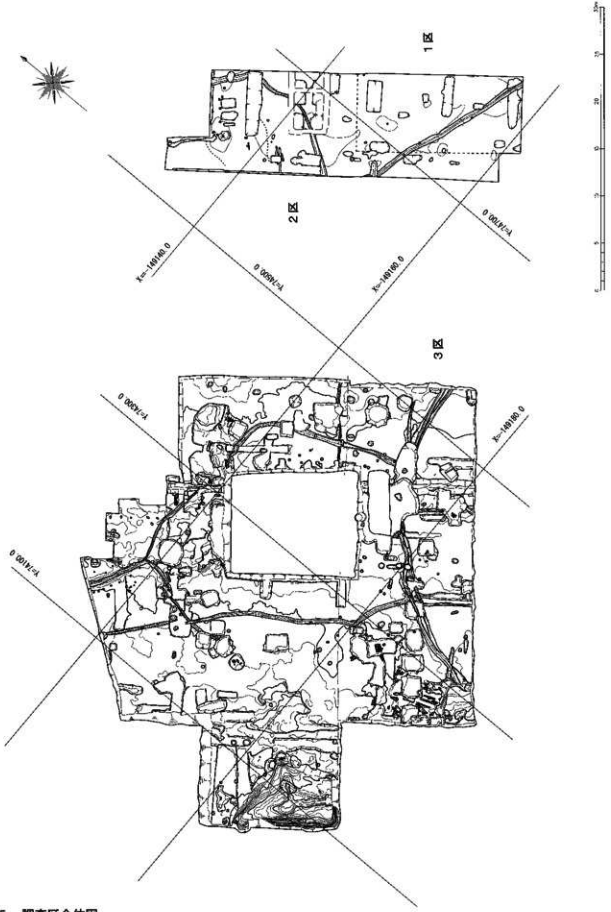

1区
2区
3区
X=-149140.0
X=-149160.0
X=-149180.0
Y=74100.0
Y=74500.0
Y=74900.0
Y=74100.0

図5　調査区全体図

Ⅱ．検出遺構と出土遺物

1．基本層序　調査区内は従前建物の基礎などの撹乱を受けているが、盛土、整地土の下に部分的に現耕土が残り、さらに近世の旧耕土が複数層存在する。この下に灰色砂質土の中世の耕土が堆積する。旧耕土層以下、暗褐色シルト、暗乳褐色シルトの順に堆積する。調査区壁面での観察や一部の遺構は暗褐色シルト上面で見え始めることから、この層面が本来は遺構検出面＝生活面となるが、遺構埋土も同様の色調のものが多く、遺構の輪郭を明確に押さえることが困難なことから、0.05～0.1m下の黄(灰)色シルト面で遺構の検出作業を実施した。暗褐色シルト及び暗乳褐色シルトの堆積は下位の基盤層である黄色シルトが徐々に上壌化した部分と捉えられ、調査区壁面で埋没状況が確認できる遺構には、暗褐色シルト上面への遺構の肩部の立ち上がりが認められるものと認められない遺構があり、十壌化に伴い埋没した遺構もあり、平面的な検出作業を困難にしている要因ではないかと考えられる。

1・2区　調査区内の南東側に中世の旧耕土が残るものの、それ以外の部分では従前建物を建築する際に削平を受け、遺構の大半は建物基礎や整地土直下で検出した。遺構面の高さは北西側でT.P.5.3m、南東側でT.P.5.2mとほぼ水平ながら、調査区の南東側でやや砂質の強い土壌になるなど、ごくわずかな層相の違いと下がり地形が認められる。

3区　調査地の西側半分を占める3区でも中央の「長田ふれあい足湯」の地下機械室をはじめ店舗の基礎などにより遺構面が失われている部分が多く、本来の地形については不明瞭な部分が多い。北西部（T.P.5.6m前後）から西側にかけて地形的に高く、そこから南東方向への下がり地形を形成する。南東部での遺構面はT.P.5.4m前後である。撹乱の影響を受けていない部分では、西側を除くほぼ全域に中世の耕土、暗褐色シルトが遺存する。

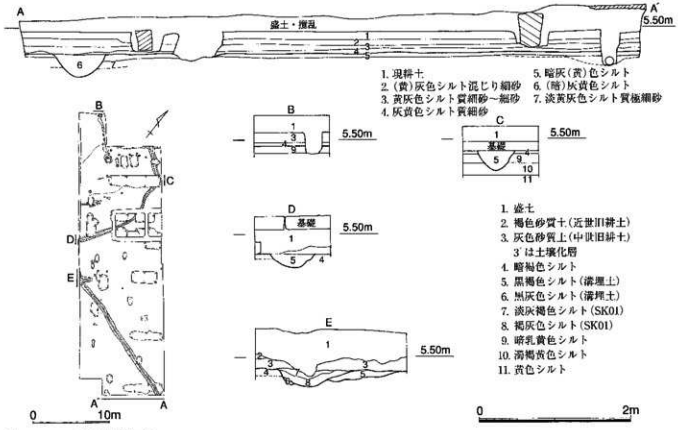
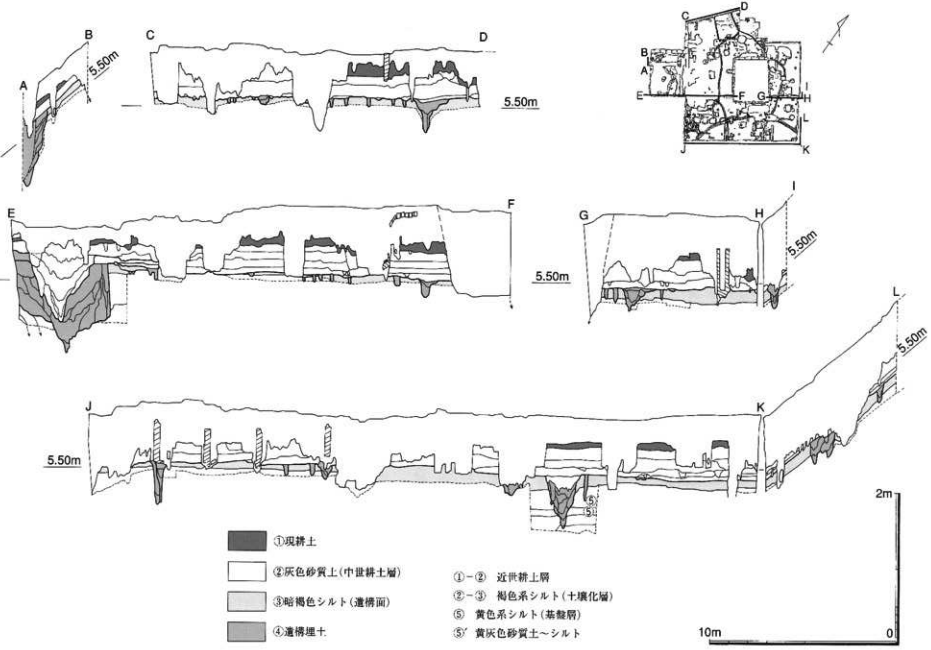


図6　1・2区土層断面図

図7　3区土層断面図


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
5.50m
①現耕土
②灰色砂質土(中世耕土層)
③暗褐色シルト(遺構面)
④遺構埋土
①－② 近世耕土層
②－③ 褐色系シルト(土壌化層)
⑤ 黄色系シルト(基盤層)
⑤′ 黄灰色砂質土～シルト
2m
10m
0

2．1・2区の調査

街区の南東に位置する調査区で、調査面積は1区、2区合わせて約280㎡である。遺構面は1面で溝3条、土坑2基、ピットを検出した。

(1) 検出遺構

①溝

SD01　幅0.6～0.7m、深さ約0.2mの東西方向の溝で、検出長は約19mである。断面の形状は西側では皿状を呈し、東側では底部が平らに近く逆台形に近い形状である。埋土は暗灰黄色～黒灰色の粘質土～シルトである。遺物は小片の弥生土器が1点出土したのみである。

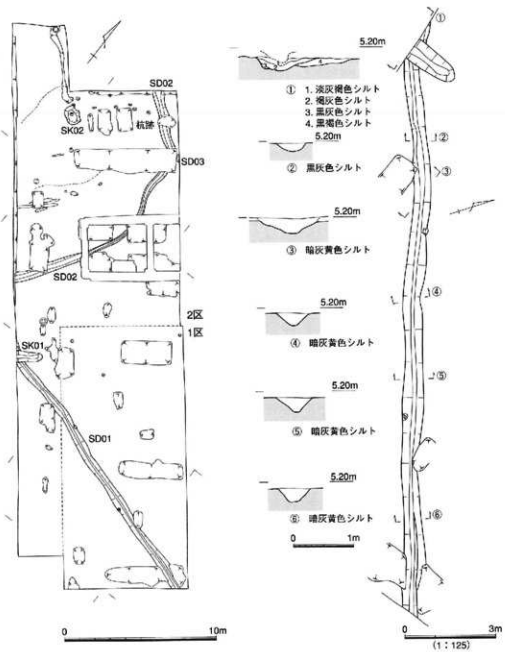


図8　1・2区平面図及びSD01平・断面図

SD02　幅0.6～0.7m、深さ約0.15mの南北方向の溝である。試掘トレンチを設けた部分でSD03と接する。埋土は黒褐色シルトの単一層で、弥生土器と考えられる極小片の遺物が出土したに留まる。

SD03　調査区の東壁でわずかに検出できた幅約0.3m、深さ約0.25mの溝である。埋土は暗灰褐色シルトで遺物は出土していない。西にやや弧を描く南北方向の溝SD02に、東西方向の溝SD03が接するものと思われる。切り合い関係や時期差は不明である。

②土坑

SK01　検出長約1.8m、幅0.7m、深さ約0.25mで、平面の形状は長楕円形を呈するが、調査区外に延び、溝になる可能性もある。遺物は出土していないが、埋土は上層の中世の耕土と同様の灰色砂質土であることから中世の遺構と考えられる。SD01を切り込む。

SK02　東西約1.2m、南北約1.0m、平面楕円形を呈する土坑である。埋土は灰色砂質シルトで、深さは0.1mと浅い。SK01同様、中世の遺構と考えられる。

③ピット　SK02の周囲で多くの杭跡を確認した。径0.05～0.1m、深さ約0.1mのものがほとんどであるが、調査区北壁際にそれらよりにわずかに大きい杭跡が並ぶ。直径（方形のものは一辺）約0.15m、深さ約0.15mで黒褐色シルト、あるいは粘土に近い埋土である。

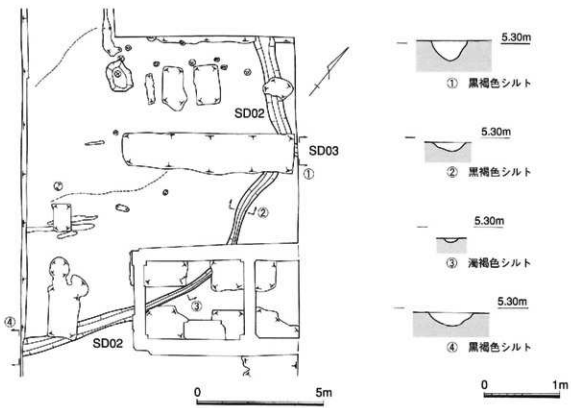


図9　SD02・03平・断面図

(2) 小　結

1区、2区では、後世の撹乱によりわずかに中世の土坑と溝の痕跡、弥生時代の土器のみが出土した長く延びる溝と時期不明の杭跡が確認できたのみであった。

遺構面上に堆積する旧耕土層は、南東部分では従前建物による影響が少なく、層の残りは良かったものの、遺物の出土量は少なかった。

3．3区の調査

街区の西半分にあたる調査区である。調査区の中央にあった「新長田ふれあい足湯」の部分についてはすでに地下の機械室設置に伴い、大規模に掘削されていることが判明していたため、この部分を島状に残して南北に調査区を分割して反転作業にて調査を実施した。調査面積約1,280㎡で、弥生時代～中世の遺構を同一面で検出した。

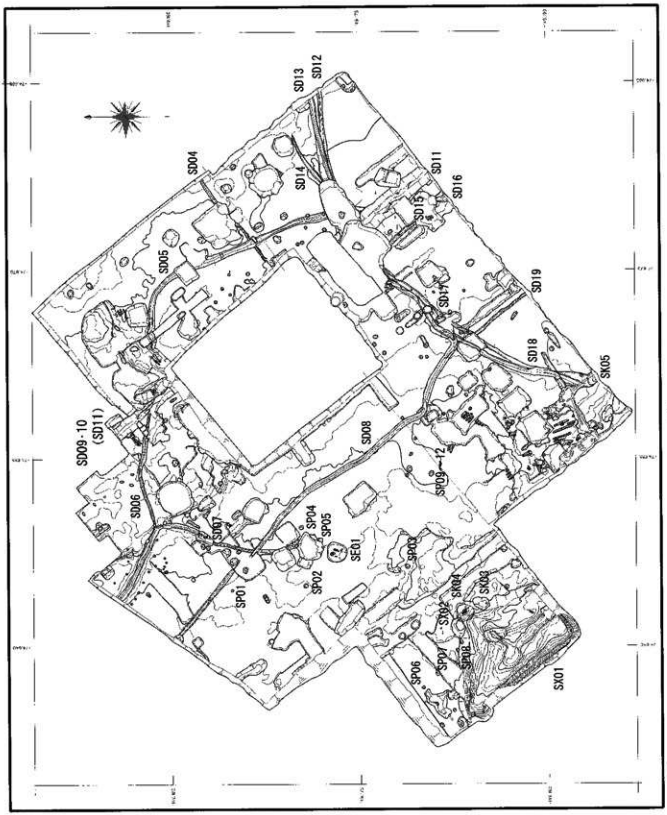


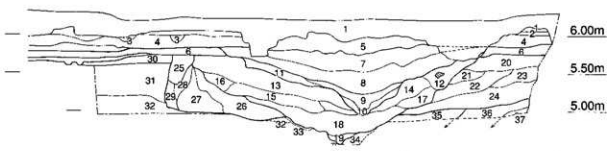
図10　3区平面図

(1) 中世の遺構と出土遺物

中世の遺構と考えられるのは調査区の西側で検出した落ち込み1基、土坑4基と井戸1基、落ち込み周辺で検出した柱穴である。

①落ち込み

SX01　3区の西端に位置する。北西、北東、南東の3箇所で屈曲部が検出され、一辺9m前後の平面方形のプランが想定されるが、南西側の大半が調査区外に延びるため、全体の規模や明確な形状は不明である。検出した範囲や断ち割りを行った状況から遺構を復元すると、元々洪水の影響を受けやすい場所で、流路状に抉られて落ち込みを形成していた所に徐々に水や砂が流れ込んだものと考えられる。南側の壁面では幅3～4m、深さ約0.8～1.2mでV字形に堆積するシルトが2層とその間に砂の堆積があり、落ち込みが形成されて以降、少なくとも二度の大きな流れ込みがあったと思われる。中央に厚く堆積したシルトの状況から、平素は緩やかに水が流れ込む状態にあり、その際水を汲む場所として利用していたと考えられる。第1次調査検出の水溜め状遺構のような盛土で禁かれたスロープなどはないが、東の隅部に窪みを設ける、あるいは各隅部にのみ人頭大の石が点在する状況は取水が行いやすいように整形し、足場になるよう手が加えられた痕跡かと推測される。



1. 盛土・撹乱
2. 現耕土
3. 灰色砂
4. 褐色砂質土(近世耕土層)
5. 灰褐色～褐色砂質土(近世耕土層)
6. 暗褐色砂質土
7. 灰褐色細砂
8. 暗褐色礫～粗砂
9. 褐色シルト
10. 褐色砂混じりシルト
11. 褐灰色細砂
12. 暗褐色粗砂
13. 明褐色細～粗砂
14. 明黄褐色粗砂
15. 明灰黄色細砂
16. 暗褐色粗砂
17. 淡灰色極細砂
18. 暗灰色細～粗砂
19. 黒灰色シルト
20. 明灰白色砂
21. 黄灰色礫砂
22. 黄灰色粗砂
23. 淡黄褐色極細砂
24. 淡黄褐色粗砂
25. 褐色砂質土
26. 黄褐色粗砂
27. 灰褐色粗砂
28. 灰色細砂
29. 褐灰色細～粗砂
30. 淡黄色シルト(遺構面：暗褐色シルト層に相当)
31. 黄色砂質シルト
32. 淡灰黄色砂質シルト
33. 黒色シルト(鉄分沈着)
34. 明乳灰色粗砂
35. 粗砂礫
36. 細砂礫
37. 礫(5cm以上)

図11　SX01土層断面図

ほとんどの遺物は中央に厚く堆積したシルトや、東の隅部の下に掘り込まれた長径約2mの浅い落ち込み内に堆積するシルトから出土しており、土師器、須恵器、瓦器、青磁片が含まれる。また下層の洪水層の上面からはかなり磨耗した突帯文土器や奈良時代の土師器高杯片、須恵器壺の頸部が出土しており、これは付近からの流入と考えられる。最終埋土の砂層から室町時代のものと考えられる陶器片が1点出土しており、中世末頃に埋没したものと考えられる。埋没後も上部に堆積した耕土層は水平堆積でなくレンズ状の堆積となっていることから、調査地の中では周辺より地形的には高いものの、依然として軟弱な地盤であって、一帯は永らく安定した場所にはならなかったと推測される。

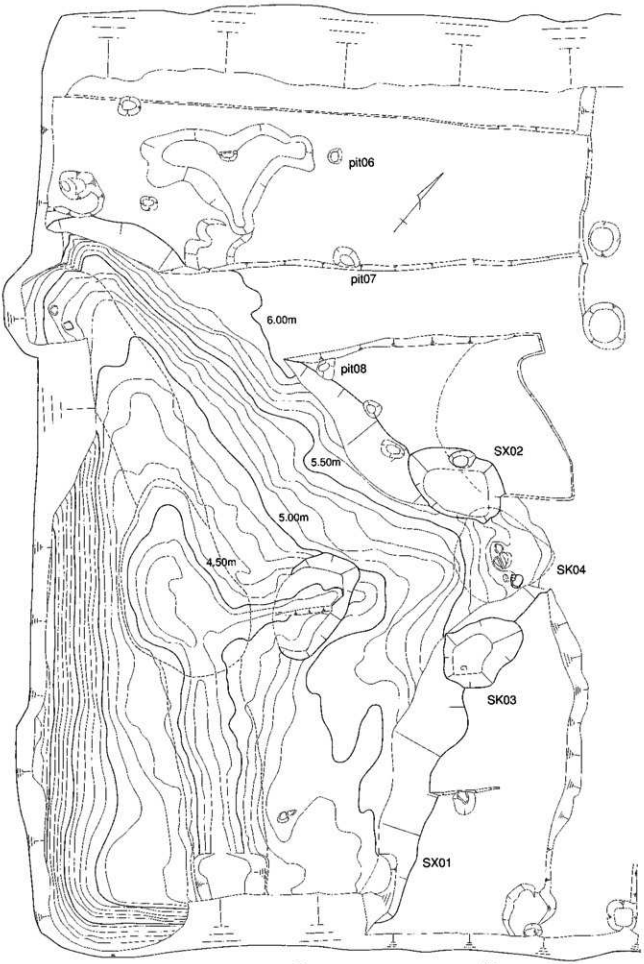


図12　SX01及び周辺遺構平面図

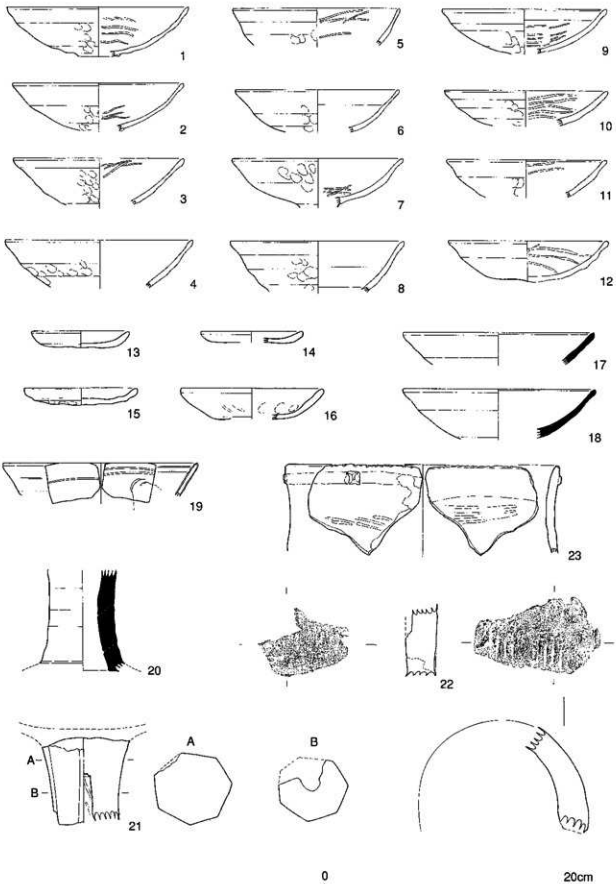


図13　SX01出土の遺物

また、SX01の北側では等間隔に並ぶ径0.15～0.3mの3基のピットやSX01の肩部や土坑と重複する形で計9基のピットを検出した。土坑とピットの切り合い関係は明らかにできなかった。建物としての拡がりは認められないが、杭や柵列になる可能性がある。

出土遺物

図化可能なものについては極力実測を行ったが、口径や器高の復元値については正確さにかける部分がある。

出土遺物では、総体的に瓦器の出土量が多い傾向が見られる。1～12は瓦器椀である。1～6は器壁が薄く、比較的直線的に体部から口縁部に延びる器形のものである。1は口径14.2cm、器高3.9cmで、底部に小振りの断面三角形の高台を貼り付ける。2は口径13.4cm、残存高3.7cm、3は口径13.2cm、残存高3.6cm、4は口径15.2cm、残存高3.8cm、軟質である。5は口径13.0cm、残存高4.0cmで、SK03の埋土直上から出土している。6は口径12.8cm、残存高3.3cmである。7～12は器壁がやや厚手である。7は口径13.4cm、残存高3.8cm、8は口径13.6cm、残存高4.0cm、9は口径12.8cm、残存高3.5cm、高台痕がある。10は口径13.8cm、残存高2.8cm、11は口径12.4cm、残存高2.9cm、12は唯一完形に復元できたもので口径12.4cm、器高3.3cmである。なで調整により指押さえの痕跡は消されるが、段が明瞭に残る。内面のミガキは圏線状で、全体に粗い感じを受ける。

13～16は土師器である。13は口径7.6cm、器高1.3cmで厚手のつくりである。14は口径8.0cm、器高1.0cm、体部～口縁にかけて器壁は厚い。口縁外側に稜が形成される。15は口径8.8cm、器高1.3cm、体部下半に指押さえの痕跡が残り、段が形成される。16は口径11.2cm、残存高2.4cmの椀で、体部内外面に指押さえの痕跡が残る。斜め上方に直線的に延びる口縁部端部は鋭角に仕上げられる。

17・18は須恵器である。17は口径15.0cm、18は口径15.2cm、均一の厚みで直線的に延びる口縁である17に対し、18は口縁端部の器壁は薄く端部は丸く収められる。

19は青磁碗の破片である。外面に沈線1条、内側口縁端部に沈線2条が廻り、内面には草花の文様の一部が見受けられる。20は須恵器長頸壺の頸部片である。残存高8.1cm、広く開いた口縁部と肩部の張りの強い体部を持つものと思われる。内面には粘土接合痕が明瞭に残る。21は土師器高杯の脚部で磨耗が顕著であるが、断面七角形、七本の稜をもつ。

22は丸瓦片である。凹面の段と凸面の右側面の一部がわずかに残っており、復元すると幅12cmほどになる。凹面に布目痕跡、凸面に叩き痕が残る。23は突帯文土器の破片である。口縁端部に刻み目、口縁端直下のD字形の貼り付け突帯がほとんど剥離している。内外面ともミガキの痕跡が認められる。

また堆積の一部に植物遺体層があり、下層の砂層との間から木製品が出土している。24は曲物の底板と考えられる破片である。最大幅28cm、厚さ0.6cmで、径30cmほどに復元できる。25は加工木片で径約3.0cm、棒状で先端を粗く削る。用途は不明である。

縄文時代の遺物については付近の調査でも断ち割り調査時に下層の洪水層などから出土している。

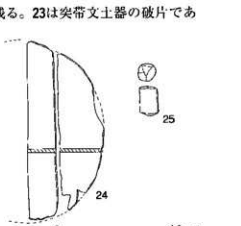


図14　SX01出土の木製品

②土坑

SX01の北東肩部で土坑を3基検出した。SX01の最終埋土の砂層を除去した段階で遺構の輪郭が見え始めることからSX01の最終埋没以前の遺構と考えられるが、一部には埋没過程において形成されたものも存在する。

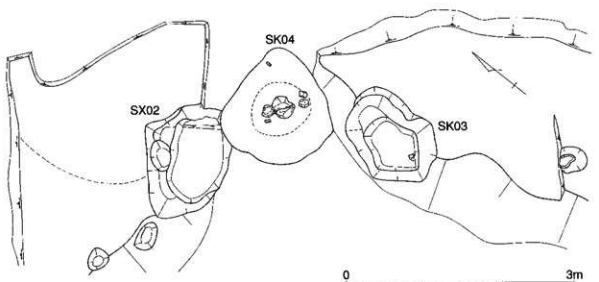


図15　SX01東肩部検出土坑平面図

SK03　3基検出した土坑のうち南端に位置する。遺構の輪郭は平面方形であったと考えられるが、北肩が崩れ、歪な形となる。上部は長辺約1.2m、短辺約1mで、断面の形状で見ると、緩やかに落ち込んだ後、下部は壁が直立に近く立ち上がる箱形となる。検出面からの深さは最大で約0.9mである。下層に砂とシルト層が緩やかに堆積した様子が窺え、中層より上で基盤層と同様の土をブロック状に含む砂質土で埋め戻された状況がみられる。土坑の中位から土師器皿が1点出土した。

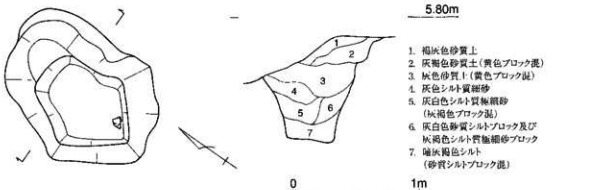


図16　SK03平・断面図

26は口径10.4cm、器高1.5cmである。全体に丁寧になで上げられ、器壁は薄く、外面には強い横なでにより稜が1段形成される。

図17　SK03出土の遺物

SK04　3基の土坑の中央で、SX01の北東角部に位置する。遺構の最終埋土は径0.7～0.8m、深さ約0.15mの浅い落ち込み状に堆積した砂層で、この上面から30cm大の礫3点と拳大の礫2点が出土した。SX01の埋没過程において意図的に礫を置いたものと想像される。

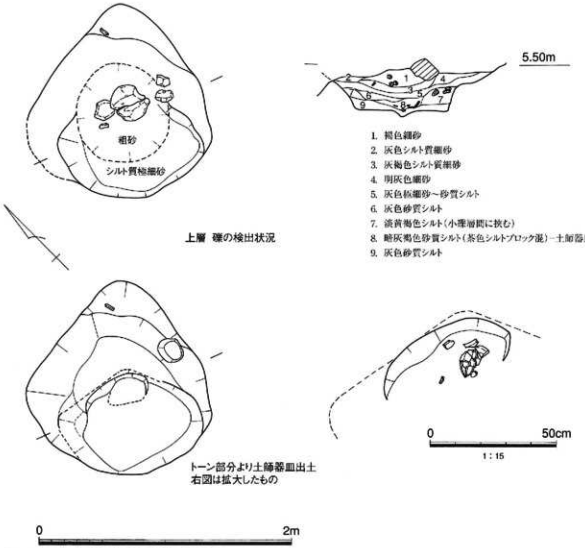


図18　SK04平・断面図及び遺物出土状況

砂層を取り除いた下部は、一辺約1.5mの平面形が歪な隅丸方形の土坑となり、断面の形状は漏斗状で、最深部までは深さ約0.4mである。土坑中央の底部に近い深さから土師器皿が出土した。取り上げの段階で砕けた皿の細片を丁寧に見た結果、皿は2点で、当初は皿の口縁部を重ね合わせていたと思われる。その他にも埋土中から土師器、須恵器、瓦器、黒色土器が出土しており、遺構の時期は鎌倉時代前半頃と考えられる。

27は口径8.6cm、器高1.2cmである。重ね

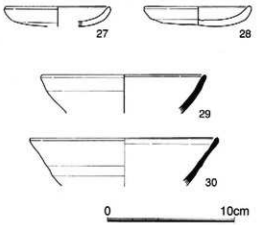


図19　SK04出土の遺物

てあった上の皿にあたる。28は口径8.6cm、器高1.2cmである。下の皿にあたる。いずれも体部内・外面ともに横なでが施されるが、器壁は厚く、ぼってりとした印象を与える。29は口径13.2cm、残存高3.0cmの須恵器椀で、わずかに内湾しながら立ち上がった後、外反する口縁部の内側には段が形成される。30は口径15.2cm、残存高3.8cmの須恵器椀で、体部上半は直線的に外側に延び、口縁端部内側には段を有する。内面下半にのみ不定方向のなでが施され、その他の部分は横なで仕上げである。

SX02　3基並んだ土坑の北端に位置する。径約4.5mの平面形が円形の落ち込みとして掘削を行ったが、遺構埋土である灰色砂質土は深さ約0.1mと非常に浅かった。この落ち込みの南側底面でさらに土坑を検出した。土坑の規模は長辺約1.5m、短辺約0.9m、平面形は歪な隅丸長方形を呈し、深さは約0.35mである。上坑の埋土は大半が砂で、底部と落ち込みの肩部にシルトが薄く堆積する。土坑からは平安時代～中世のものと考えられる土師器、須恵器片がわずかに出土したのみで、ほとんどの遺物は上層の浅い落ち込み部分から出土している。一連の遺構と判断したが、埋土の状況から最上層の灰色砂質土は中世の耕土層が浅い窪みに溜まったもので、南側の土坑となった部分は別遺構の可能性が高い。

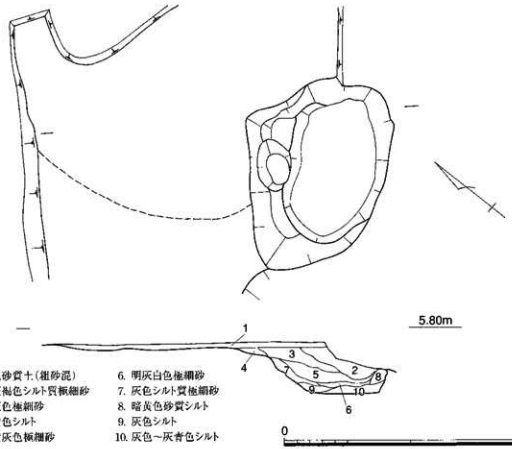


図20　SX02平・断面図

31は断面逆台形の高台が付く須恵器椀で、高台径10.6m、残存高2.2cmである。平安時代の遺物と考えられるが、最上層の灰色層から出土しており、遺構の年代を示すかは明らかでない。

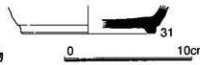
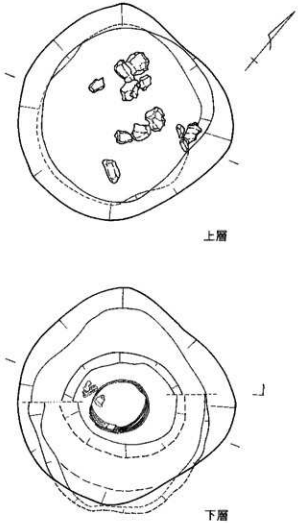


図21　SX02出土の遺物

③井戸

SE01　直径約1.7m、平面形は歪な円形を呈する井戸である。検出面から約0.7mの深さで灰色砂を検出し、砂面で熱を受けた礫が10個ほどと須恵器鉢の体部片が1点出土した。鉢32は底径11.6cm、残存高8.0cmで、底部は糸切り未調整、粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残る。



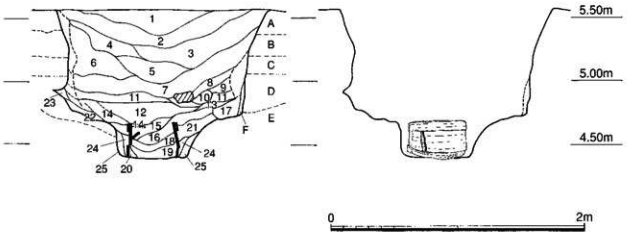


図22　SE01平・断面図

礫と須恵器鉢が投棄され、底面と考えていた灰色砂は硬く締まる砂であったが、さらに0.2mほど擂鉢状に落ち込み、この下から深さ約0.4m、径約0.6mの円形の掘形を検出し、中央底で井筒となる曲物を確認した。曲物を据えた黄色粗砂が湧水層である。曲物は側板と上下の箍が良好に遺存しており、曲物内から須恵器椀の破片2点と、曲物を据えた掘形の上面から須恵器椀の破片1点、曲物の一部と考えられる木片が出土した。曲物内出土の須恵器片のうち1点は掘形上のものと接合したことから、いずれも井戸が使用されていた時に投棄されたものと考えられる。曲物は下段の箍が側板からはずれていたが、ほぼ井戸構築に際して据えられた当初の姿で検出されたと言える。

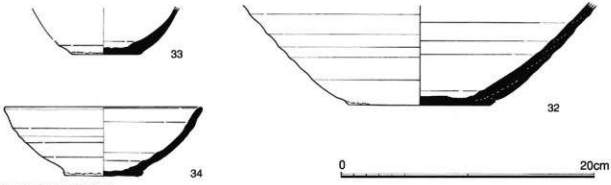


図23　SE01出土の遺物

33は底径5.8cm、残存高3.7cmの須恵器椀である。底部は回転糸切りで、底部内面には粘土紐の痕跡が残る。底部には厚みがあり、全体にぼってりとした感を与える。34は復元径15.4cm、器高5.5cmの須恵器椀で、回転糸切り未調整で、粘土を底部側面になで付けた痕跡が残る。直線的に延びる口縁部は厚みをもち、端部を丸く収める。

曲物35は径36.0cm、高さ22.0cm、厚さ0.6cmで、上下に幅5.0cmの箍が付く。側板、箍ともにヒノキ材である。側板の綴じ合わせは1箇所6段綴じである。箍も綴じは1箇所の2段綴じである。36は曲物の箍と考えられる木片で、内側にやや粗いケビキが施される。

井戸は洪水により曲物上部までが埋没した後、人為的に埋め戻されたものと推測される。井戸の廃絶期は出土した須恵器より13世紀前半と考えられる。

挿図写真6　曲物　箍の綴じ部

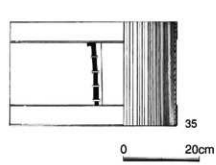


図24　SE01出土の木製品

(2) 古墳時代の遺構と出土遺物

古墳時代の遺構は溝1条である。北側のSD09・10と南側のSD11は同一の溝である。

SD11　調査区の東寄りの部分で、北西から南東方向の溝を1条確認した。撹乱により大部分を失うが、調査区内での検出長は約33mである。幅約1.8m、深さは約0.8mで、断面の形状

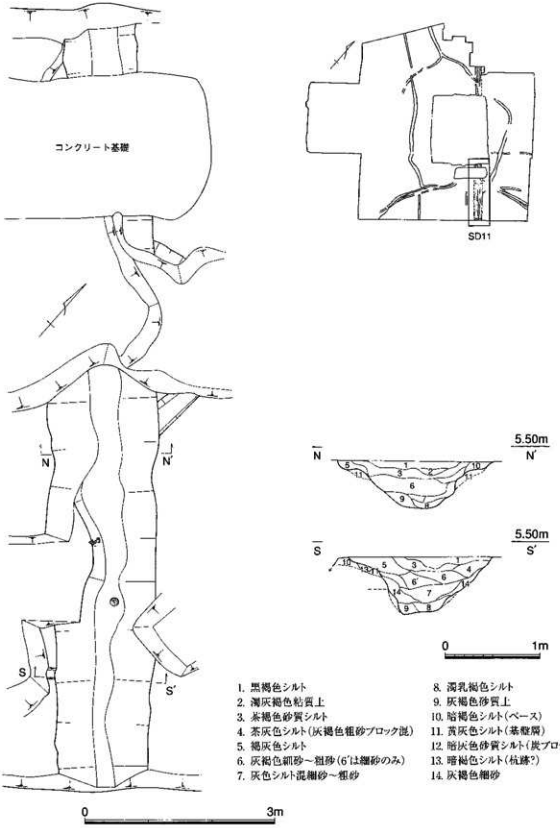


図25　SD11平・断面図

は緩やかなV字形、また部分的に逆台形を呈する。溝の中位に堆積した砂層から完形の須恵器の杯蓋1点と、最上層に堆積した黒色シルトから須恵器の杯蓋片が出土したほかに遺物の出土はなかった。

37は口径13.3cm、器高3.5cmの須恵器杯蓋である。天井部のヘラ削りは全体の2分の1に及び、非常に丁寧に施される。TK43型式並行期、5世紀後半に属する。口縁部に一箇所、幅約2.5cm、高さ約1.0cmの大きさで打ち欠いた部分がある。

38は口径16.8cm、器高4.0cmの須恵器杯蓋で、遺構の最終埋土である黒色シルトから出土した。ヘラ削りは天井部の3分の1の位置までで、全体にやや丸みを帯び、調整は甘い。TK217型式並行期、6世紀後半のものである。

溝の埋土は下層に砂の堆積が続き、最上層に黒色シルトが堆積する。中位の砂層の中に炭層の薄い堆積があり、掘り直しなどの状況も想定される。古墳時代の中頃に掘削され、洪水や自然堆積などにより埋没しながらも、最終的に緩やかに土が堆積する古墳時代後期の段階まで機能していたと考えられるが、遺構内からは図化した2点の土器が出土したのみで、ほぼ遺物を含まない状況と言える。37の須恵器杯蓋にみられる打ち欠きの行為は通常、祭祀など、何らかの意図をもつ行為に伴うと理解される場合が多いが、今回の調査では溝の埋土や周囲においてその他に特異な状況は確認されていない。

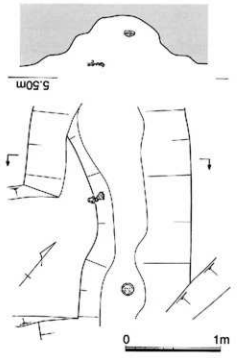


図26　SD11遺物出土状況平・立面図

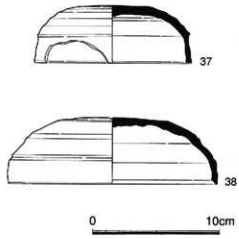


図27　SD11出土の遺物

挿図写真7　SD11遺物出土状況

(3) 弥生時代の遺構と出土遺物

①溝

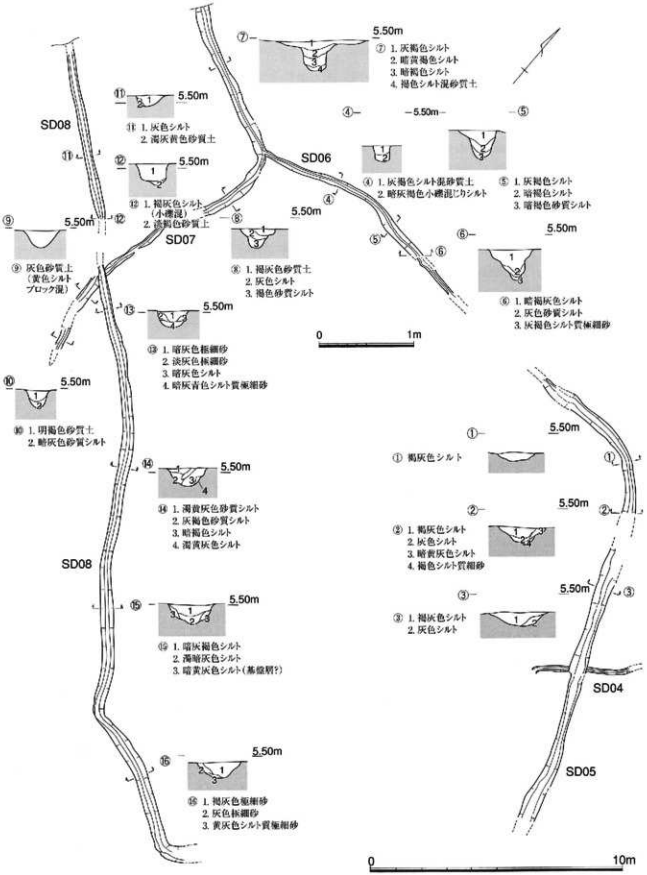


図28　3区北半検出溝群　平・断面図

調査地全域に拡がる幅0.5m前後の細長く延びる溝を検出している。3区では14条の溝を検出した。出土遺物はほぼない状況であるが、わずかに弥生土器と考えられる破片が出土したこと、またそれ以外の時期の遺物が全く混入していないこと、古墳時代後期の溝に切られる溝の存在から、同様の溝は弥生時代の遺構と判断した。

また2区で検出したSD03のようにごく一部が確認される状況や、3区では南北に反転して調査を実施したことから、同じ溝に2つの番号を与えたものもある。

SD04 調査区の東中央部で検出した北東から南西方向への直線的な溝である。幅約0.4m、深さ約0.1mである。埋土は黒色シルト層の単一層である。遺物は出土していない。

SD05 調査区の東で検出した溝で、北西から南東へ延び、その後南に屈曲する。北側はSD06に続く。断面の形状は浅い皿状である。幅約0.6m、深さは0.1～0.2mである。

SD06 調査区の北東部で検出した溝でSD05から続く東西方向の溝である。溝の北端でSD07と接する。埋土が近似しており、切り合い関係にあるというよりは埋没過程に差が生じたものと考えられる。深さ約0.7mで、断面の形状は上方がV字形、下方は箱形で平底となる。

SD07 SD06と接する南北方向の溝である。北端での断面の形状は、下部は箱形に垂直に掘り込まれ、上部は浅く幅広になる。上端幅約0.9m、底部幅約0.25m、深さ約0.3mである。南側での断面の形状はU字形となり、幅は約0.3mである。

SD08 調査区の中央に北西から南東に向けて掘られた溝である。南端で東に折れ、南半で検出した溝群と合流する。南半の溝が埋没した後も開口していたが、新たに掘削されたものかは明らかでない。北西側で箱形に掘削された部分もあるが、基本的な断面の形状は半円形である。幅約0.5m、深さは約0.2mである。

SD12 調査区の南東端で検出した溝で、SD13を掘り直した可能性があり、上部の幅は0.8mとやや幅広である。深さは約0.2mである。

SD13 SD12とほぼ同じ位置に掘削されていた溝である。検出面からの深さは約0.3mで、底の形状は平らである。形状からSD18に続く同一の溝と考えられる。

SD14 SD13に並行する溝である。調査区壁面ではSD13に切られた様子が分かり、そこでは幅約0.5m、深さは約0.2mあったが、平面的には幅0.15mの底部のみが確認できた。

SD15 調査区の南中央で検出した北西から南東方向の溝で、現在の地割りに沿う。埋土の上方から礫が1点出土した。

SD16 調査区南端でわずかに検出した溝で、さらに南側に延びるものと考えられる。方向的にはSD05から続く溝と考えられる。古墳時代後期に掘削されたSD11に切られることから、古墳時代後期以前の年代が与えられる。同一の溝と考えられるSD05・06・07・16の総延長は弧を描きながら約50m続くことになる。

SD17 SD18を掘り直した可能性を含む溝である。断面の形状からはSD12から続く溝かと判断される。SD18と重複しない部分があり、そこでの幅は約0.2m、深さ約0.2mである。出土した甕の口縁片は弥生時代中期に属するものと考えられる。

SD18 SD17により切り込まれる。溝の形状はSD13に似ており、断面の形状は逆台形、あるいは漏斗状になる。幅約0.6m、深さ約0.3mで、扁平な石が2点出土した。

SD19 SD04・15と同様、現在の地割りに沿う溝である。幅約0.3m、深さは約0.4mである。

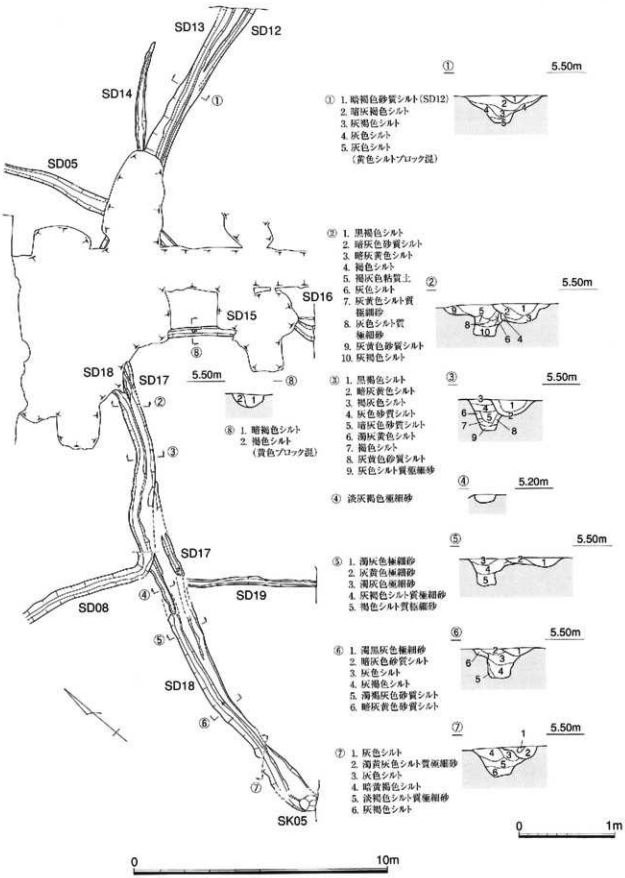


図29　3区南半検出溝群　平・断面図

溝からの出土遺物は数条の溝から各1点ずつ微細な遺物が出土したに留まる。図化できたのはSD17・18から出土した遺物のみである。

SD17から出土した**39**は甕の口縁片で、復元径19.0cm、残存高4.0cmである。くの字形に強く屈曲する口縁部をもち、口縁端部は上下に摘み出す。内外面ともわずかにハケによる調整痕が確認できる。SD18から出土した**40**は3cm角の口縁端部の破片で、貼り付け突帯が確認できる。弥生時代前期後半のものと考えられる。遺物が少ないため溝の時期の特定は困難であるが、**40**自体は磨耗が顕著であり、溝の時期を直接示すものでなく付近からの流入と思われる。

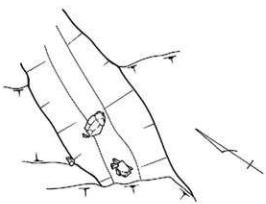


図30　SD17遺物出土状況平面図

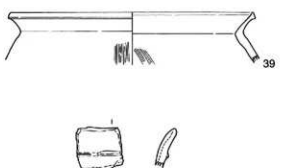


図31　SD17・18出土の遺物

②土坑

SK05　調査区の南端で検出した直径約1.2mの円形の土坑である。深さは約0.5mで、埋土の上層から弥生土器と考えられる破片が1点出土している。SD18埋没後に掘削され、基盤層である黄色シルトをブロック状に含む粘質土で人為的に埋め戻されている。

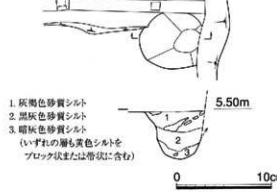


図32　SK05平・断面図

挿図写真8　SK05土層断面

③柱穴

SX01周辺で検出した中世の柱穴以外に約30基の柱穴を検出した。埋土は黒色シルトの単一層や砂混じりの灰褐色土で、遺物を含まず、出土しても極小片のものであり、遺構の時期を特定するには至らない。明確に建物を構成する柱穴は認められないが、調査区の北端と調査区中央東寄りに約1.2m間隔で列を成す配置があり、柵列などになる可能性を含む。また調査区の中央で検出したSP09～12は直径0.3～0.5m、深さ約0.2mの平面が円形の柱穴で、L字形に並んでおり、小規模な建物の存在が想定される。いずれも黒色シルトの中に黄色シルトをブロック状に含む共通する埋土である。SP09、12から弥生土器片が出土した他、調査区北西で散見される同規模の柱穴SP05からは弥生土器片とサヌカイト片の出土があった。41はSP05からの出土遺物で、水平口縁をもつ弥生土器高杯の口縁部の破片と考えられる。

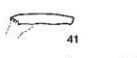


図33　SP05出土の遺物

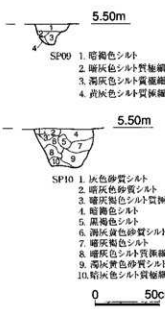


図34　SP09・10土層断面図

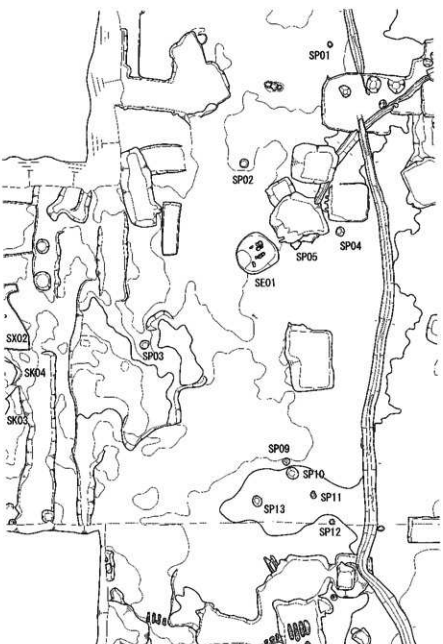


図35　調査区南西部検出遺構　平面図

(4) 遺構に伴わない遺物

今回の調査で出土した遺物の大半は、遺構検出面及び土壌化層の上に堆積する灰色粘質土の旧耕土層から出土したが、概して出土量は少ない。中世の土師器、須恵器を中心に奈良～平安時代の須恵器や中世の青磁碗、蛸壺や土錘などの漁撈具、釘や銅銭（元豊通宝）が出土しており、弥生時代～古墳時代の遺物はほとんどない。検出遺構からは瓦器の出土が目立ったが、包含層からの出土はほとんど認められない。

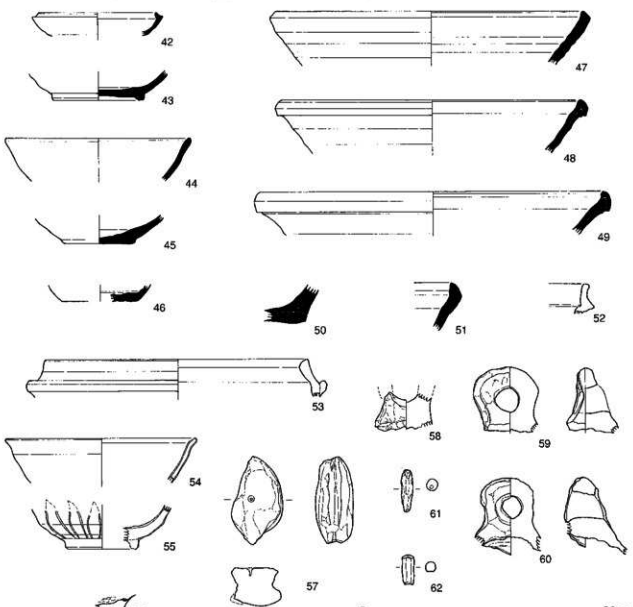


図36　遺構に伴わない遺物

(5) 小　結

3区では第1次調査地で検出された遺構のうち、溝の続きは確認できたが、平安～鎌倉時代の明確な建物は検出されなかった。柱穴は30基ほど確認できたが、一部を除き規模も小さく、遺物の出土も少なかった。後世の耕作や市街地化に伴い旧地表面が削り取られたと考えてもその数は少ないものといえる。井戸や流路を利用した水溜め（水汲み）状遺構などの水に関わる遺構の検出が当該地における特徴であろう。

Ⅲ．大橋町遺跡第２次調査で出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査は、大橋町遺跡第２次調査時に13世紀前半頃に廃絶した井戸および鎌倉時代前半の水溜め状遺構から出土した曲物部材や加工木の樹種を明らかにすることを目的として、樹種同定を実施する。

１．試　料

試料は、13世紀前半に廃絶した井戸であるSE01から出土した曲物部材４点（遺物番号35・36）、鎌倉時代前半の水溜め状遺構であるSX01から出土した曲物底板１点（同24）、及び加工丸材１点（同25）の合計６点である。各資料の詳細は結果と合わせて表示する。

２．分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、広葉樹材については、独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースも利用する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他（2006）を参考にする。また、木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995，1996，1997，1998，1999）を参考にする。

３．結　果

樹種同定結果を表３に示す。木製品は、針葉樹２種類（ヒノキ・ヒノキ科）と広葉樹１種類（コナラ属アカガシ亜属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、１分野に１～３個。放射組織は単列、１～10細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、１～10細胞高。

上記のヒノキを含むヒノキ科のいずれかであり、仮道管の配列等がヒノキに類似していることを考慮す

表３　樹種同定結果

遺物番号（台帳番号）	遺物名	出土地区	遺構名	位置	時期	樹種（分類群）	
						和名	学名
35（R-038-1）	曲物側板	３区	SE01		13世紀前半	ヒノキ科	Cupressaccae
35（R-038-2）	曲物箍（上）	３区	SE01		13世紀前半	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa*
35（R-038-3）	曲物箍（下）	３区	SE01		13世紀前半	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa*
36（R-039）	曲物側板	３区	SE01	掘形内	13世紀前半	ヒノキ科	Cupressaceae
24（R-040）	曲物底板	３区	SX01		鎌倉時代前半	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa*
25（R-041）	加工丸材	３区	SX01		鎌倉時代前半	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*

れば、いずれもヒノキである可能性が高いが、分野壁孔が観察できない等の理由で属・種の同定ができなかったため、ヒノキ科とした。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

4．考　察

13世紀前半頃に廃絶したSE01井戸から出土した木製品は、井戸底の湧水層である黄色粗砂層に据えられた曲物の側板がヒノキ科、鋤板の上・下にはめられた縁がヒノキ、曲物近くの掘形内から出土した曲物鋤板片がヒノキ科に同定された。一方、鎌倉時代前半頃に構築され中世末に完全に埋没したとされる水溜め状遺構SX01から出土した曲物底板はヒノキ、加工丸材がアカガシ亜属に同定された。

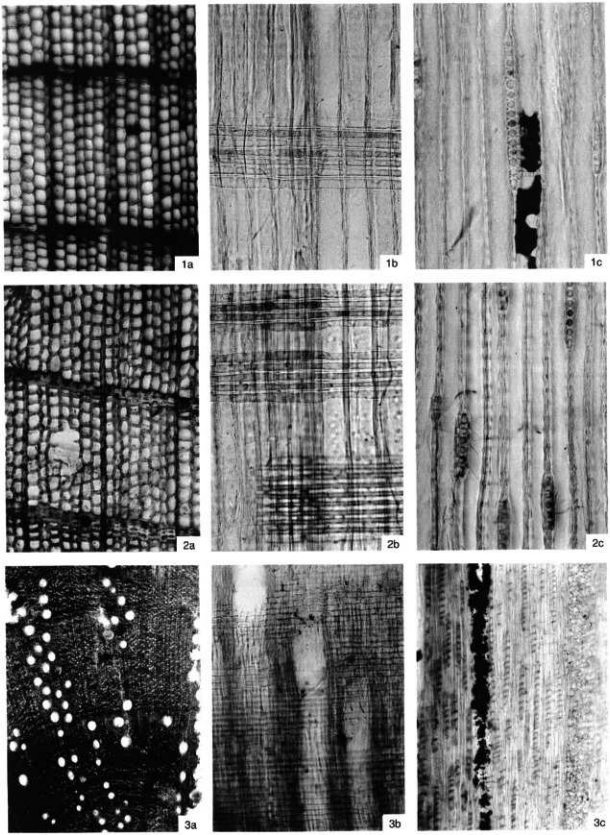
SE01井戸及び水溜め状遺構SX01から出土した曲物は、いずれもヒノキないしヒノキ科が利用されていることが確認された。ヒノキの木材は、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性・防虫性に優れている。また、軸方向組織のほとんどが仮道管で占められ、早材部・晩材部の材質差が少ないため、薄い板を剥り取るのが容易で曲げ強度も高い材質を有している。このようなヒノキの材質が、曲物にヒノキを利用した背景にあると考えられる。

播磨・摂津地域の考古遺跡から出土した中世の曲物は、ヒノキの使用例が多く、木製品においてスギ材が多用される但馬地域においても曲物にはヒノキ材が多用されている（中村，2001　松葉，2001a・2001b　パリノ・サーヴェイ，2001）。今回のSE01井戸と同様に井戸底の集水施設として利用されている曲物の樹種については、神戸市内に所在する二葉町遺跡における13世紀中頃の井戸跡の調査例がある（松葉，2001a）。その結果によれば、曲物の副板にツガ属が1点確認されているが、その他の鋲板や箍などの部材にはヒノキあるいはヒノキ属が利用されている。このように曲物にはヒノキを中心とする針葉樹材の選択が行われていたことが窺える。今回の結果も、多少の時期差があるものの同様の傾向を示す事例といえる。

また、水溜め状遺構SX01からは広葉樹のアカガシ亜属を利用した加工丸材も確認されている。中世におけるアカガシ亜属の木材の利用例は、二葉町遺跡の13世紀前半とされる杭と12世紀中～末の井戸枠・横槌（松葉，2001a）、玉津田中遺跡の鎌倉時代の井戸枠（島地，1996）、上脇遺跡の鎌倉時代の横槌および鍬（パリノ・サーヴェイ，2002）で確認されている。しかしながら、中世の木製品の樹種同定結果を概観すると、アカガシ亜属など広葉樹材の使用例に比較して、ヒノキなどの針葉樹材の使用例が圧倒的に多く（中村，2001）、木材利用の主体は針葉樹材に移行していたことが指摘されている（松葉，2001a）。アカガシ亜属の木材は、重硬で強度の高い材質を有することから、槌槌および鍬など強度を要する製品において適材といえる。今回の加工丸材の用途については不明な点が多いが材質を考慮した木材利用が行われていた可能性がある。

以上、大蔵町遺跡第2次調査時に出土した曲物などの木製品の樹種について述べてきたが、木材利用のあり方を考える上で調査区周辺の古植生との関係について検討することも大切な課題と考える。六甲山南麓地域の古植生については、辻ほか（2003）などの花粉分析成果の総括がある。それによれば、弥生時代以降になると、それまで優占していたアカガシ亜属などの照葉樹林要素が減少し、マツ属やヒノキなどの温帯性針葉樹花粉が増加傾向を示すようになる。中世には調査事例が少ないものの、マツ属・コナラ亜属などの二次林要素が増加し、草本花粉が卓越するようになり、植生に対する人為的撹乱の影響を強く受けるようになったことが推定されている。このように中世には植生破壊が進行するが、今回同定されたヒノキやアカガシ亜属などに由来する花粉化石が確認されていることから、遺跡後背の山間部などにはこれらの樹種が分布しており、入手可能な木材であったことが示唆される。ただし、中世以降の古植生については不明な点が多く、中世以降の森林資源の変化については、今後の資料蓄積をもって評価する必要がある。

挿図写真 9　出土木材組織顕微鏡写真



1. ヒノキ（遺物番号24）
2. ヒノキ科（遺物番号35）
3. コナラ属アカガシ亜属（遺物番号25）
   a:木口　b:柾目　c:板目

200μm:3a
200μm:1a, 2a, 3b･3c
100μm:1b･1c, 2b･2c

引用文献

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東　隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181．

伊東　隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所，66-176．

伊東　隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201．

伊東　隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166．

伊東　隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216．

松葉　礼子，2001a，二葉町遺跡出土木製品の樹種同定．「二葉町遺跡発掘調査報告書　第3・5・7・8・9・12次調査」，神戸市教育委員会，141-166．

松葉　礼子，2001b，松野遺跡出土木製品（古墳時代後期初頭～鎌倉時代）の樹種同定．「松野遺跡発掘調査報告書第3～7次調査」，神戸市教育委員会，175-186．

中村　弘，2001，兵庫県における樹種同定資料について．兵庫県埋蔵文化財研究紀要，創刊号，兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所，103-121．

パリノ・サーヴェイ株式会社，2001，御蔵遺跡から出土した木製品等の樹種．「御蔵遺跡　第4・6・14・32次発掘調査報告書」，神戸市教育委員会，114-122．

パリノ・サーヴェイ株式会社，2002，上脇遺跡から出土した木材・炭化材の樹種．「兵庫県文化財調査報告第233冊　神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　上脇遺跡Ⅱ」，兵庫県教育委員会，148-152．

Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（編），2006，針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修），海青社，70p.［Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］．

鳥地　謙，1996，玉津田中遺跡出土木製品の樹種．「兵庫県文化財調査報告第135－6冊　神戸市西区　玉津田中遺跡－第6分冊－（総括編）　田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」，兵庫県教育委員会，15-49．

鳥地　謙・伊東　隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p．

辻　康男・矢作健二・辻本将也・田中義文，2003，芦屋市内に所在する考古遺跡の自然科学分析．「芦屋市文化財調査報告書第47集　平成12・13年度国庫補助事業　寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書　－集落東端部の様相と知見」，芦屋市教育委員会，135—163．

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］．

Ⅳ. ま と め

(1) 大橋町遺跡第２次調査の成果

今回の調査により検出された遺構は弥生時代、古墳時代、平安時代末～鎌倉時代に属し、先の第１次調査における検出遺構と時代的には符合するものであった。

弥生時代

今回の調査において幅0.5m前後の長く延びる溝を十数条確認している。溝からの出土遺物が非常に少なく、その時期については根拠が薄弱であるが、SD17における遺物の出土状況や、後世の遺構に古相遺物が混入したような状況ではなかったことから、現段階で弥生時代中期に属するものと判断した。但し、第１次調査地においては弥生時代の遺構は１条のL字形に屈曲する溝が検出された以外に全く同様の遺構が検出されておらず、周辺でのこの溝群の状況については不明である。

古墳時代

古墳時代の遺構は３区の中央で検出した溝１条のみであった。この溝は第１次調査地でも確認しており、北西から南東方向にほぼ一直線に掘削されていることが明らかになった。調査地間で未検出の部分もあるが、これを復元すると、現在確認されている溝の総延長は約100mとなる。

今回の調査では３区北半の中央部分でまず溝の最終埋土であった黒色シルトを検出し、下層にさらに砂の堆積した幅広の溝が存在することを確認していたが、遺物が全く伴わない状況であったため、後述する弥生時代と考える溝とそれ以前の自然地形に伴う溝と推測していた。その後、南側を調査した段階で古墳時代の遺物が出土したことから溝の時期が判明し、その形状が明らかになった。遺物の出土層位より、溝は５世紀中頃に掘削され、少なくとも６世紀中頃までは開口していたと考えられる。何らかの区画に伴う溝と考えられるが、その区画の基準となる道構は今回の調査地、あるいは第１次調査地においても確認されていない。おそらくは当遺跡の西側約0.2kmに位置する松野遺跡において同時期の道標・遺物が数多く検出されており、位置的にも何らかの関係を有するものと考えられる。

松野遺跡は長田区南西部における拠点的な集落と目され、今回の調査地から北西へ約１km離れた地点での松野遺跡第１次調査では、豪族居館とされる掘立柱建物が数棟とそれを取り囲む柵列が検出されている。一部の建物には今回検出した溝の方向軸であるN40°Wの方位で合致するものがある。また居館跡の南側に拡がる竪穴住居群中にも方向性で共通するものが認められる。現時点で詳細な検討を加えていないため、多分に憶測になるが、今回の調査地辺りが松野遺跡の外郭になるものであろうか。

中世

第１次調査での中世初頭の遺構は、平安時代末～鎌倉時代前半の掘立柱建物が９棟復元され、その他に木棺墓や井戸、土坑、多数の耕作痕（畝溝）を含む溝が検出されていた。

今回の調査地における中世初頭の遺構は、１・２区の北側で検出された遺構を除くと、ほぼ先の調査地に近い３区の南半の範囲に集中しており、内容としては流路跡を利用した水汲み場（SX01）と、やや離れた位置に掘削された井戸（SE01）といった主に取水に関わる遺構とその周辺において検出した土坑や柱穴であった。付近に建物の存在する可能性があったが、今回の調査では明確な建物は復元できなかった。柱穴からはほとんど遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明である。落ち込みや井戸、土坑からの出土遺物は、い

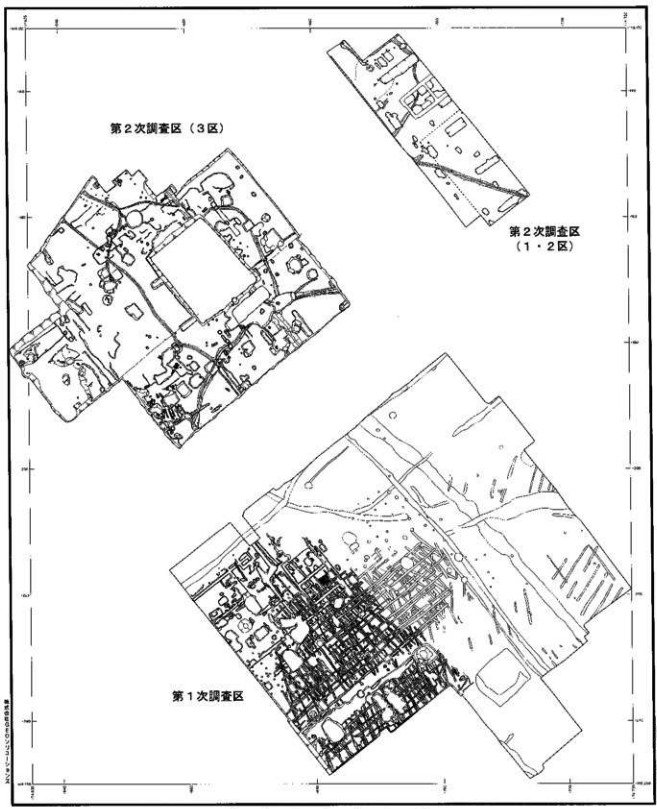


図37　大橋町遺跡第１・２次調査地平面図（合成図）

ずれも概ね12世紀末～13世紀前半の時期に収まるものであった。

3区の西側で検出したSX01はこの地を貫流した流路跡である。最初の流れ込みの形成がいつ頃であるのか明確でないが、中世初頭段階には緩やかに水が流れ込む状態であったことが中位に厚く堆積したシルト層より推測される。SX01の東肩部ではSX02、SK03、SK04の3基の土坑を検出したが、前二者はそれぞれの遺構が埋没した後に、その上部がSX01の中層に堆積するシルト層上層の砂層により削られる。この砂層はSK04の最終埋土となる。SX02をSK04が切り込む状況と合わせると、SX02、SK03がやや先行して掘削されていたものと考えられる。SK04は土坑底で2枚の土師器皿が出土したことや上面に礫が置かれるなど、東側に大きく抉り込んだ流路の角を意識したものと考えられ、両端の土坑が埋没した後も機能し、SX01の埋没と合わせて埋まったものと推測される。

また遺構の埋没状況に関して、SE01やSK03、SX02の土坑の下層は周囲からの流入土であるシルトや洪水により堆積したと考えられる砂の層で埋まっているが、その上部には一様に基盤層である黄色シルトをブロック状に含む層があり、一時期に埋め戻された感がある。SX01の埋没過程、またSX01南壁断面で観察される2度の大きな流れ込みの痕跡がいつ頃のものかにもよるが、土坑や柱穴の検出から周辺に建物が存在した可能性も指摘でき得るが、新たな流路の貫流や洪水のために遺構は埋め戻され、その後はSX01を利用しやすいように整形し、そこに溜まる水を利用していたのではないかと現状では推測する。SX01の最終埋没は中世末の段階であるが、洪水などの影響を考え、これ以降、この場所には建物は造られず、耕地化していったものと考えられる。第1次調査においても、調査区西側で検出した建物に少なからず柱穴の重複が認められ、建て替えが行われたことが明らかになっているが、出土遺物の時期幅から短期間に営まれた集落と推測されており、今回検出した一部の遺構の埋土の状況はそれと大きく齟齬をきたさない内容と考えている。

3区では現代の大きな撹乱が多かったという状況もあったが、検出した柱穴はいずれも規模、内容ともに明確なものは少なく、今回の調査地は第1次調査地で検出された居住域に付随するが、建物を配する空間ではなかったものと推測される。

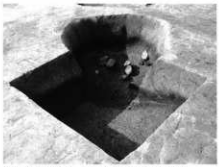
(2) SE01にみられる地震痕跡と思われる事象について

今回の調査で検出したSE01において地震の影響を受けたと考えられる痕跡を確認した。

SE01は直径約1.7mの歪な円形の平面を検出した後に掘削を行ったが、当初は深さ0.7mまで堆積する褐色系粘質土の埋土に基盤層である黄色シルトがブロック状に混じり、埋め戻された痕跡が顕著であったこと、加えて埋め戻しの埋土を除去した灰色砂面で礫や須恵器の鉢が出土したことから、この層面を底とする素掘りの井戸や溜井かと考えていた。

ただ掘形の壁面を構成する土は基盤層以下、いずれも比較的粘性の強い土であったが、南東部の一角に同様の土がなく、シルト気を帯びた砂層が壁面に抉り込む状況が見られた。井戸や水溜め遺構などでは掘形が崩れている例が多々あるため、それに類する状況かとも考えたが、周辺の同じ程度の深度をもつ撹乱でもSE01と同様の砂層は確認しておらず、礫の出土レベルで記録作業を行った後、壁面にもぐり込む砂層の状況と掘形の形状を確認すること、及び下層の状況を確認する目的で断ち割り調査を行った。

遺構の南側に1.5m四方のトレンチを設け、底とした灰色砂面まで掘り下げた。その結果、灰色砂面でやや南にずれた状況の直径約２mの円形の変色部を確認し、壁面では下部の砂が上方に延びながら、掘形の壁中に吸い込まれる状況が見られた。円形の変色部をさらに掘り進めた結果、検出面から0.9mの深さで曲物の上面を検出した。この結果、SE01は直径46cmの曲物を井筒とする井戸であることが明らかになった。



挿図写真10　SE01断ち割り状況

曲物は側板、上下の箍とも非常に残りが良く、ほぼ井戸の構築当初の姿を留めるものと考えられる。但し、下段の箍は側板からはずれ、上体が北西側に傾いた状態で検出された。井戸の使用中、あるいは埋没過程における変形とも考えられたが、先述したように曲物下部の砂が壁面に吸い込まれながら上方に延び、その部分で基盤層とその下層の堆積層にひび割れのような痕跡が見られ、ひび割れの間の土層は折れたように屈曲し、下方に沈み込む様子が認められた。また層の「ずれ」に伴う土層の傾きの角度、方向と曲物の傾いた方向は同じであった。

挿図写真11　SE01断ち割り断面

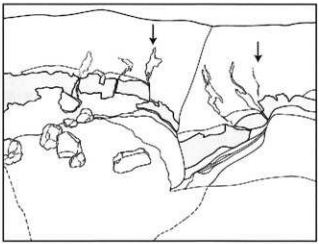


図38　挿図写真11の線描図（SE01掘形壁面の土層の「ずれ」）

この事象の要因として地震による影響が想定され、曲物が据えられた湧水層、あるいは上層の砂層が液状化現象を引き起こした結果によるものと考えられる。

湧水層が液状化に伴い水平方向に強く揺れるとともに、上方に水と砂が噴き上げた結果、基盤層以下の層を切り裂いたようで、これにより遺構埋土に接する基盤層にひずみが生じ、軟弱な遺構埋土を圧迫するとともに下部の曲物に圧力をかけたものと想像される。曲物は北西側に強く傾き、南東側の下段箍が浮き上がる状態になったと考えられる。

調査区内では、この他にも柱穴の埋土に不自然な段差が認められ、SE01と同様の状況が調査区北側の近～現代の井戸の掘形に層の「ずれ」＝断層となって現れ、遺構の埋土が軟弱な部分では掘形の一部が崩落する状況が確認されている。この近～現代の井戸の状況から、今回の調査で確認された事象は「兵庫県南部地震」に伴う地盤変動と考えられる。

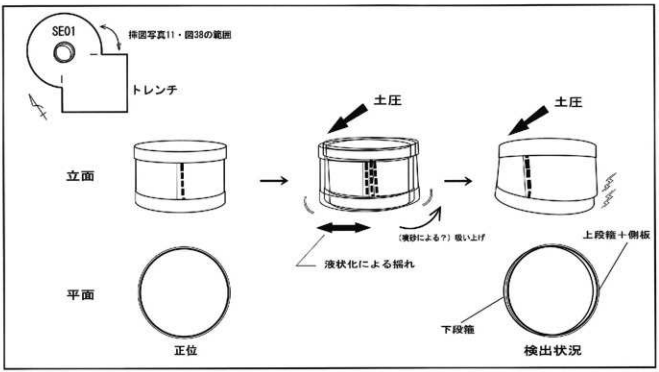


図39　SE01出土曲物破損状況模式図

また神戸市内では震災以降、地震の影響により土中の遺構が変形する例が数多く見つかっている。地震による痕跡は様々で、液状化現象に伴った噴砂、地滑り、断層、地割れは至るところで確認されている。今まではこれら地震の痕跡は「慶長の大地震」に起因すると解される例が多かったが、兵庫県南部地震を経て、さらに地震痕跡の検出例が増加している。

挿図写真12　3区近～現代井戸の掘形にみられる土層の「ずれ」

(3) 弥生時代の遺構－溝の検出とその性格について

次に今回の調査において最も判断の難しかった遺構について、現状で考えられる遺構の様相について書き留めておきたい。

調査区内で幅0.5m前後の溝を十数条検出した。出土遺物は乏しいがSD17出土の甕の口縁部片から、一連の溝は弥生時代中期に属する遺構であると判断した。調査区内は従前建物の基礎などの影響を受け、溝の切り合いがあったと考えられる部分が失われ、前後関係など不明な点が多い。溝について簡単に復元作業を行い、あわせてその内容を概観する。

溝は一見すると並びや方向に規則性がないように見える。直線的に延びる溝、弧を描き延びる溝、蛇行する溝など、掘削された形態は不規則にみえるが、直線的に延びるものも最終的に弧を描きながら収束しており、大きく弧を描く溝の一部が今回の調査区で現れたものと理解する。溝の平面的な分布は不明瞭ながら、旧地形や等高線に沿って掘削されていた可能性が高いものと考えている。中世以降の耕作による削平や早くからの市街地化に伴い、遺構の上部は既に失われている部分も多いであろうが、調査地は北西から南東方向

への緩やかな傾斜地形となっており、基本的に等高線に沿って掘削されたと考えられる。

検出した溝には2種類あり、溝の断面の形状において断面下位が箱型を示すもの、また全体に浅くレンズ状に堆積したものに分けられる。調査区南半で検出した溝の断面は切り合い関係から、先の溝の断面は箱形となっており、その後に重複する形で掘削された溝の埋土はレンズ状に堆積している。形状の相違は明確であるが、重複する新たな溝が掘削されたか、あるいは掘り直しの痕跡であるかは明らかでない。溝の切り合いがほとんどないために、唯一SD08が全体の状況を把握する上で鍵となる。溝は調査地全域に長く延びる一群と、南側で弧を描く一群に分けられる。SD08を基準とした場合、どちらのグループの溝もSD08よりも古い段階になる。しかし同時に存在していたかは明らかでない。

またこの他に現在の地割りと並行する溝を4条検出しているが、いずれの溝からも出土遺物はない。SD04とSD05、SD13とSD14が交差し、検出状況からは地割りに沿う溝が古相を示すようだが、埋土が類似していることもあり、明確とはいい難い。

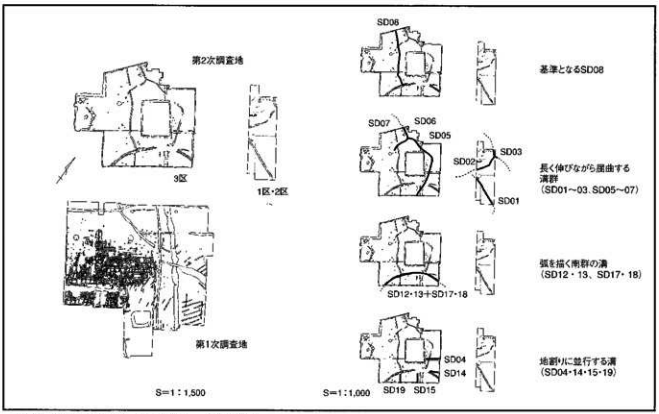


図40　弥生時代の溝　推定グルーピング図

弥生時代の遺構では、他にわずかながら柱穴と土坑を検出しているが、居住域を形成するものとは考えられない。溝の性格については出土遺物が皆無に近い状態であるから、おそらくは耕作痕に伴う溝と判断するのが妥当と考えられる。土壌分析などを実施していない状況では明確な根拠に乏しいが、自然地形に沿って溝を廻らせて区画を設けるとともに水を順送りに確保する程度の耕作地があったものと考える。

また大橋町遺跡周辺における弥生時代の耕作地については、妙法寺川の左岸中流域～下流域に立地する大田町遺跡、岩松町遺跡において耕作痕や畝溝、区画溝と考えられる例が確認されている。大田町遺跡では6本の細長く連続してU字状を描く溝を検出している。

溝の幅は約0.6m、溝の長さは一辺約16mである。若松町遺跡では５つの単位の島に伴う畝溝を検出している。復元される畝の幅は約1.4m、最も長い畝の長さは約19mである。どちらも住居址に近接する場所で検出された耕作痕で、遺構の時期は両遺跡とも弥生時代後期に属する。比較的規模の小さな集落－居住域－の中の生業空間であると解される。

今回検出した溝が弥生時代中期とすれば、大橋町遺跡に近接する地域には当該期の集落は今のところ存在しない。弥生時代中期の生業域であった場合は母体となる集落は、北西約２kmに立地する戎町遺跡が候補に挙げられる。この辺りまでが集落域、また生活活動の範囲であったのか、今後の周辺での調査により明らかになるものか期待される。

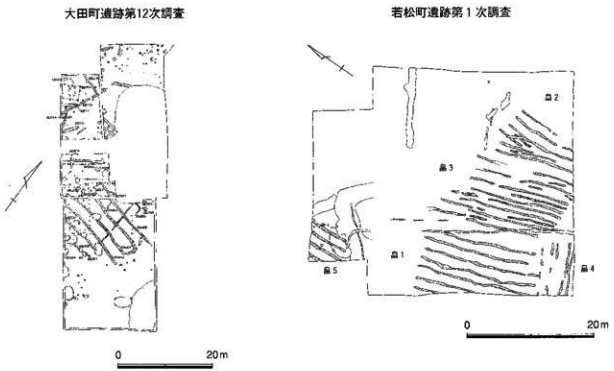


図41　周辺遺跡検出の耕作に伴う溝

(4) ま と め

以上、甚だ推測の多いものとなったが、今回の調査において気付いた点と疑問の残る点について若干触れた。

大橋町遺跡は弥生時代、古墳時代、中世の遺跡と考えられるが、居住域が形成されるのは中世の一時期に限られるようである。これは先の調査と同様の結果であり、大きな変化はなかった。また集落の中心は第１次調査地の西寄りの部分と考えられ、そこに一時期、９棟前後の掘立柱建物に構成される小規模な集落があったと考えられる。３区西側のSX01がどのように流れていたかにもよるが、さらに西側へ同時期の集落が大きく拡がる可能性は少ないと考えられる。

また各々の遺構の時期決定については、総体的に遺物の出土が少なかったことから非常に困難であった。ただ今回の第２次調査地では、住居址やそれに付随する建造物の存在は確認できなかった。集落域の縁辺部、あるいは生業域であったと考えられる。

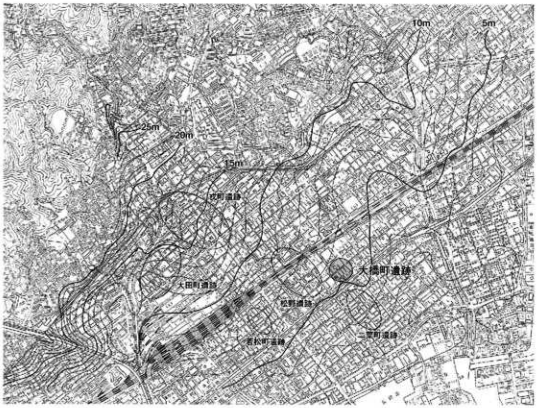


図42　長田区平野部微地形復元図　2000 関野豊編「水等遺跡・松野遺跡発掘調査報告書」所収掲載図を改変

各時代の状況から当該地が独立した集落域でないとするならば、いずれの地域や遺跡に属する空間であるのか、現状では直接これらを証明する資料に欠ける。地理的、また検出遺構の年代からは松野遺跡から集落の拡大を図った可能性が高いが、両遺跡間に流路（SX01）が形成され、洪水による被害などのためにその動きをやめてしまったものかと現状で想像をたくましくする。

図42は昭和48年作成の1／2,500の地図を基準に長田区平野部の地形を復元したものである。周辺の遺跡が沖積地上の微高地に形成されている様子が明らかである。またこの図では妙法寺川、苅藻川間の旧「蓮池」が谷状地形を呈していたことが鮮明に表れており、両河川間の遺跡の形成に少なからず影響があったことを想像させる。

妙法寺川、苅藻川両河川流域には大橋町遺跡をはじめとする同様の弥生時代・古墳時代・中世の集落遺跡が点在し、沖積地上の遺跡は帯状に分布する。遺跡を結ぶラインが自然堤防などの微高地にあたり、既に埋没河川となった様々な流れの影響を受けながら集落の消長があったと考えられる。

(5) あとがき

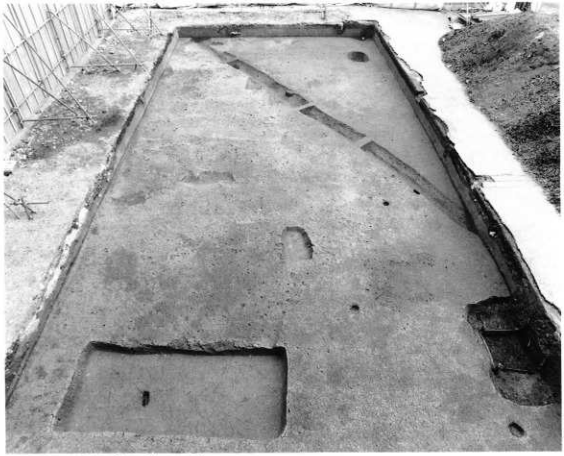
震災復興に伴いJR新長田駅を中心とする南・北両地区における震災復興事業に伴い、様々な調査が実施されてきた。これまでにも多くの新知見が得られ、人々の暮らしが脈々と受け継がれている事実が明らかになりつつある。大きな痛手を被った被災地ではあるが、新しい街の歴史の創造に際して、発掘調査で得られた成果が活用されることを願う次第である。

調査地遠景（海上より）―矢印の交点が調査地周辺

写真図版１

１．調査地遠景（東上空から）―矢印の交点が調査地周辺

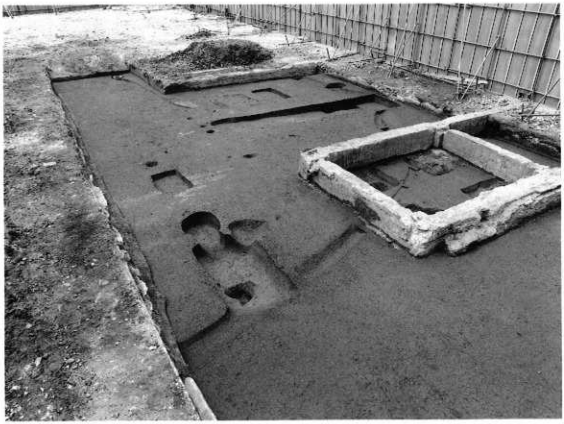
２．調査地周辺垂直写真
平成10（1998）年撮影
【神戸市行財政局航空写真データより】―白線調査地加筆



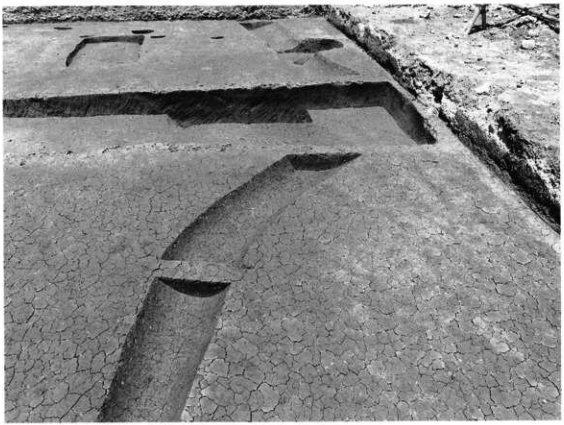
1．1区SD01検出状況（北西から）

2．2区SD01及びSK01検出状況（西から）

２区全景（南東から）



1．2区SD02・03（南から）



2．2区SD02北半（南から）

3 区垂直写真《モザイク合成》

1．3区北半全景（北東より）《クレーン撮影》

2．3区北半（北から）

3．3区北半（東から）

3 区南半全景（東から）〈クレーン撮影〉

1．SX01全景（北東から）

2．SX01中央部土層堆積状況（北から）

写真図版 9

1．SX01及び周辺土坑
（北から）

2．SK03土層断面（南から）

3．SK03遺物出土状況（北から）

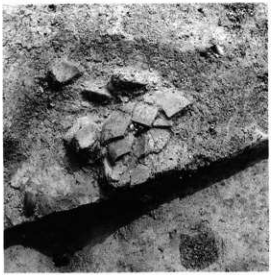
4．SX02土層断面（南から）

5．SX02全景（南から）

1．SK04全景（南西から）

2．SK04土層断面（南西から）

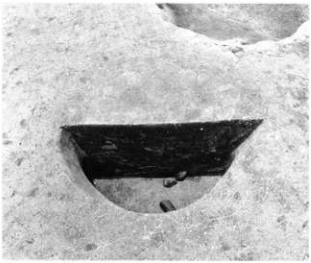
3．SK04上面検出状況（北西から）



4．SK04遺物出土状況（南西から）

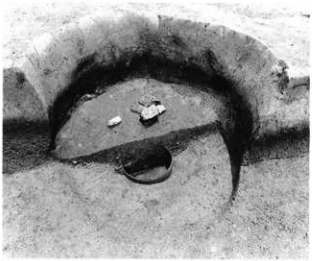
写真図版11

1．SE01全景（南から）



2．上層土層断面（南から）

3．上層遺物出土状況（南から）



4．下層埋没状況土層断面（南から）

5．曲物出土状況（南から）

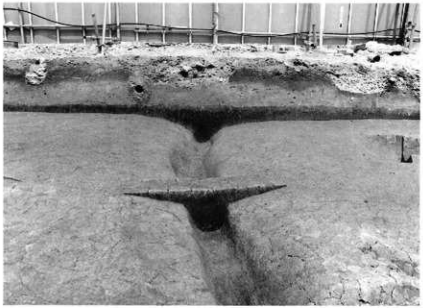
1．SD11全景（北東から）

2．土層堆積状況及び
遺物出土状況（北西から）

3．遺物出土状況近景（北西から）

写真図版13

1．SD08北半全景（南東から）

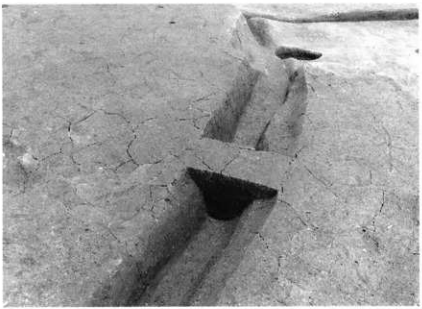


2．SD07断面⑦（南東から）

3．SD08断面⑭・⑮（北西から）

1．SD06・07（南東から）

2．SD06断面⑤（東から）



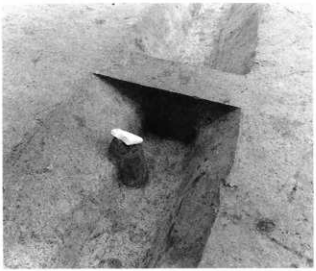
3．SD07断面⑧（南から）

写真図版15

1．3区南西部全景（北東から）

2．SD17・18西半（北東から）

3．SD13・14土層断面（西から）

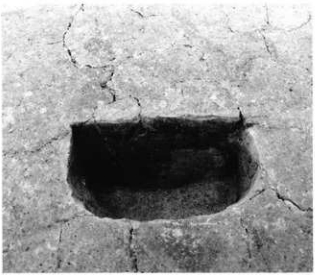


1．SD18土層断面及び石の出土状況（北東から）

2．SD17遺物出土状況（南西から）

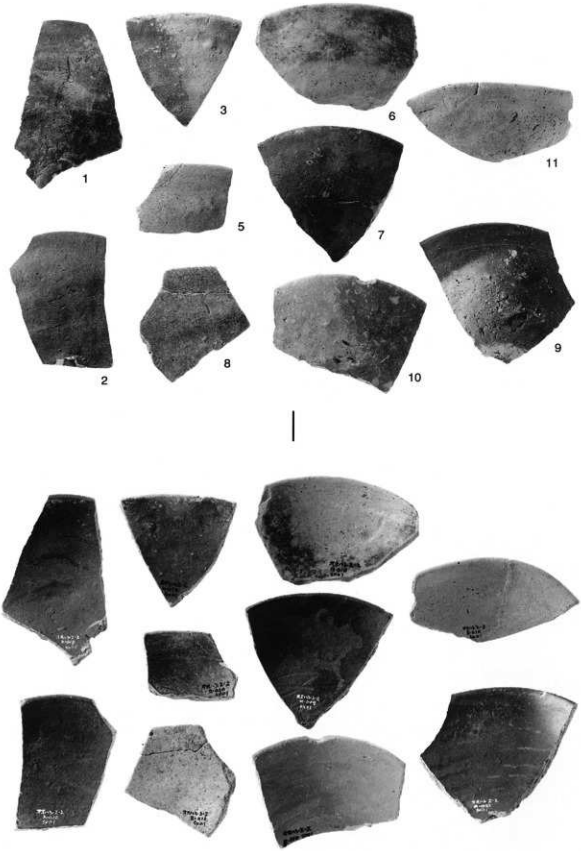
3．SP09～12（南から）

4．SP09・10土層断面（南東から）

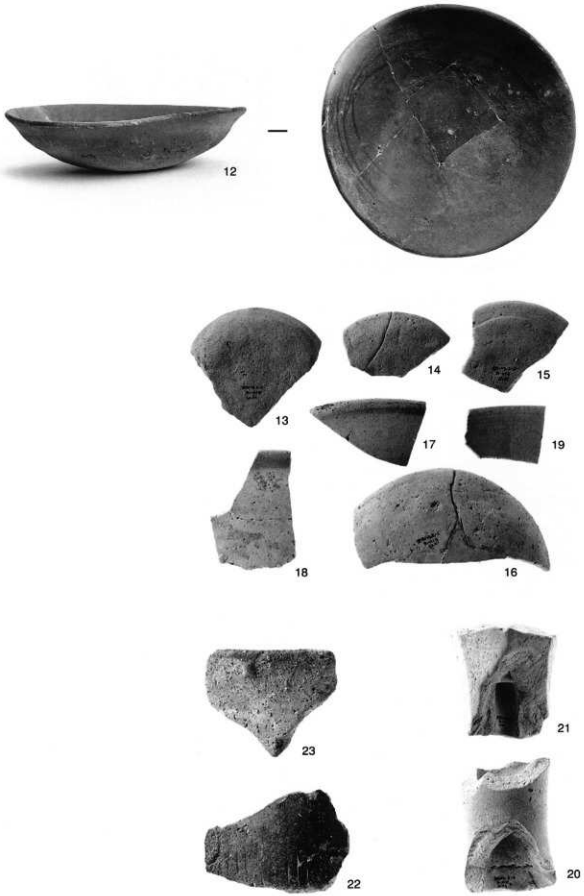


5．SP02土層断面（南東から）

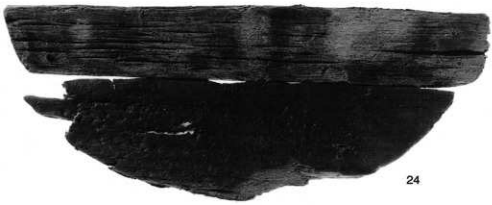
6．SP03土層断面（南東から）



SX01出土の遺物(1)



SX01出土の遺物(2)



SX01出土の木製品

SK04出土の遺物

SK03・04・SX02
出土の遺物

SX01及び周辺土坑出土の遺物

33

34

32

35

SE01出土の遺物

37

40

39

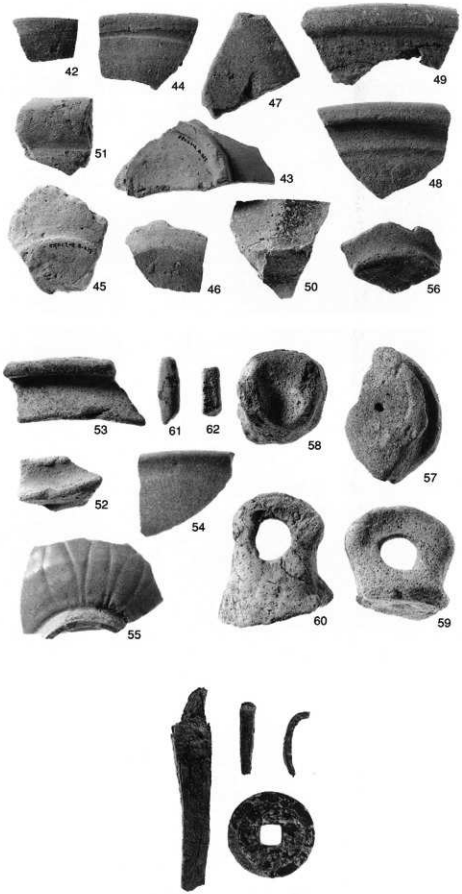
38

41

SD11出土の遺物

SD17・18・SP05出土の遺物

SE01・SD11・SD17・18・SP05出土の遺物



遺構に伴わない遺物

報告書抄録

ふりがな	おおはしちょういせき　だい2じ　はっくつちょうさほうこくしょ
書　名	大橋町遺跡　第2次　発掘調査報告書
副書名	新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業（若松5）に伴う
編著者名	阿部敬生・藤井太郎（編）
編集機関	神戸市教育委員会
発行機関	神戸市教育委員会
所在地	〒650-8570　神戸市中央区加納町6丁目5番1号　TEL 078－322－6480
発行年	西暦2007年11月30日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
大橋町遺跡（おおはしちょういせき）	兵庫県（ひょうごけん）神戸市（こうべし）長田区（ながたく）若松町（わかまつちょう）5丁目（ちょうめ）	28106	6-32	34°39′09″	135°08′53″	20060417～20060125 20060509～20060624	第2次-1　140㎡ 第2次-2　1,420㎡	震災復興第二種市街地再開発事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大橋町遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代後期 鎌倉時代	溝・土坑・柱穴 溝 井戸・流路・水溜め状遺構 土坑・柱穴	弥生土器 土師器・須恵器 青磁・陶磁器	

大橋町遺跡第2次発掘調査報告書

―新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業（若松5）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書―

2007．11．30

発行　神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL．078－322－6480

印刷　福田印刷工業株式会社
神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号
TEL．078－811－3131

神戸市広報印刷物登録　平成19年度第185号　（広報印刷物規格　A－6類）